女學雜誌

第二百五十七號
明治二十四年三月廿一日發兌

淨瑠璃に對する諸意見

一揆政治

救世軍を訪ふの記

高等中學事件終末錄

文字を知らぬ詩人

風流魔評

小說車の轍大附錄一册

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜 (ヱ) 女

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 257. March, 21th. 1891.

Translation of the Contents of the 257th. Number of the Jogaku Zasshi :—

第二百五十七號目次

(1) *The Female Normal Schools of the Empire number twenty-five. They are supported in the following Ken :—Niigata Ken, Chiba Ken, Tochigi Ken, Shizuoka Ken, Yamanashi Ken, Nagano Ken, Miyagi Ken, Fukushima Ken, Yamagata Ken, Akita Ken, Kyoto Fu, Fukui Ken, Ishikawa Ken, Toyama Ken, Shimane Ken, Okayama Ken, Hiroshima Ken, Yamaguchi Ken, Kagawa Ken, Ehime Ken, Kôchi Ken, Nagasaki Ken, Fukuoka Ken, Saga Ken, Kagoshima Ken.*

(2) *In Takada, of the province of Echigo, the Penitentiary contains many female prisoners. They are guarded by two matrons who are very highly spoken of for their faithfulness and kindness to the prisoners.*

(3) *Ten students of the Kyoto Normal School lately visited the Blind, Deaf and Dumb Asylum of that place. They expressed great pity for the unfortunates, and, on their return, contributed from the allowance, given them by the Government, the sum of Four yen, fifty-six sen. Of this sum, the gentlemen students gave Two yen, seventy-six sen, the ladies, One yen, eighty sen.*

(4) *In the Andoseiin, the Lying in Hospital, in Honjo Ku, Tokyo, the number of rooms has lately been increased. It is now intended to admit charity patients to the number of ten, each month.*

(5) *In Nagano Ken, a school has been established for the training of those who are expected to take charge of and amuse young children, while their mothers are at work. The school now numbers seventy-four pupils, and every day for one hour some easy science, or songs and plays, calculated to amuse the little charges, are taught.*

Although but recently started, the school promises to become a Success, and, the people of that district take great interest in its prosperity.

誌 (ヱ) 學

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百五十七號 明治二十四年三月廿一日發兌

社說

一揆政治（上）

（其一）自由とは何んぞや

自由とは何んぞや。人の輕々しく言ふ所ろの語ばにして、之を解すること頗ぶる容易ならず。民權家常に云へらく、自由！自由！と。所謂るその自由なるものは、德義上の自由か、政治上の自由か。人類としての自由か、社會上の自由か。吾人常に惑ふ。

社會の關係以外に立ち、純然人類の自然なるものに付きて之を言はば、人は本來個々獨立の存在者たり、人の上に人なく、人の下に人なし、各自一の靈性を包みて天地の間だに生れ出づ、何ものと雖ども得て之を害消すること能はざる也。此意義に於て「人は自由なり」と云はゞ、何人か之を疑がふものあらん。然れども、之あるを以ての故に、人は社會上に於て惣ての自由を所持すと云ふこと能はず。純乎たる當然の理論は、之を理想の世界に於てのみ全く主張することを得。用ひて實際世界に適採するに至つては、深く其の應用の度合を考査せずんばある可らず。社會は賢愚長幼男女の人の集合躰にして、相約し一の目的を達することを旨とす、其の契規する所ろ幾分の不自由を生ぜずと云ふことなし。故に、何如なる眞理と云へども、之を社會に應用するに至つては、多少の檢束を蒙むらずんばあらず。理想世界の爲に言はば幾分の眞理を無みするが如しと云へど、實際世界の爲に言はば之を其の眞理適用の區域となす、即はち社會上十分の眞理を主張したるものと謂はざることを得ず。

故に理論の世界にては、人は皆な同等に自由なりと言ふことを得べし、活世界に於ては、万人各自万様の自由を享受し、皆な多少の不自由を蒙むらずんばあらず。人類いよ〳〵發達するに連れて、其不自由の度いよ〳〵減ずべし、社會いよ〳〵文化するに連れて、政治上の自由いよ〳〵擴張すべし、然れども到底幾分の壓制なくんばあらず。活世界に居て純乎たる自由を求めんとせば、去つて海に浮び奔りて山に入るに若かず。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

たゞ夫れ必要以上に越えて壓制の行はるゝとき、之を壓制の世と云ふ、出來べき限り自由の行はるゝとき、之を自由の世と云ふ。古今民權論の闘爭は、此の度合の闘爭のみ、漠然たる架空論者にあらずば、無上唯一の自由を要求すると能はざるを知る。

社界は何を以て此の免かる可らざるの壓制を爲す乎、之れ各人々の自由を保護せんが爲めなり。所云る多少必然の束縛を蒙むると云ふものは、即はち相約して大ひに自由を傷害せざらんとを盟ふものなり。之を、不自由を以て、自由を守護すと云ふ。

（其二）我　儘

日本近來の景勢は、頗ぶる自由享受の區域を擴張したり、之れ邦家の爲めに頗ぶる慶すべきの事とす。然れども、滔々たる大勢すでに一の大悪兆を現ず、憂國の士深く警戒する所ろなかる可らず。

蓋し近世の社會何事に於ても自由を加へたるとを見る、然れども人は之が爲めに果して其自由を享受したるとを樂しみ、亦之によりて一層其性能を開發したるとありや。吾人が察知する所ろによれば、世は追々自由となりて、人は益々我儘となり、我儘の増長するによりて、追々他の自由を妨げ、將に邦家を亂離の内に導き入れんとするとを見る、斯の如くんば、自由を與ふるは即はち不自由を養ふの根元にして、人は之が爲めいよ〳〵壓制を蒙むり、且つ益々其性を卑しうせんとす。果して然らば、制度の上に於て自由を擴張したるは、偶たま以て、實際世界を毒したるに過ぎず。

吾人は自由を愛す、故に自由の爲めに好き實の結ばれんとを、固く信じ且つ切に望む。然りと雖ども、我國近世の景勢は、自由の爲めに、將に大弊を來さんとす。吾人平素自由を愛するの故を以て、此の悪結果を救ふと能はず、日本は自由を擴張したるが爲めに、反つて大ひなる損害を買んとせり。

見よ、邦民の何如に我儘なる。子は親を敬するとを知らず。臣は君に忠なるとを知らず、民は法律に信なるとを知らず。この有樣に驚ろきて大言疾呼するもの少なきにあらず、左れど其の疾呼大言するものゝ中にも隨分我儘なるものあり、彼の所云る忠孝の事を喧ましく論述するものなど、就きて其私を窺がへば實に驚ろくべきの言行を爲すものあり。滔々世人

多くは自由の爲に食傷し、非常の大病に罹り居らざるは無し。見よ、邦民の何如に我儘なる。學校内に入りて仔細に観察すれば、此處に一の確たる馴練あらず、校長の威權は塵よりも輕ろく、風儀の定まらざるは浮草に似たり、全校の万事はほとんど書生が我儘のまゝに支配せらるゝなり。議會に入りて仔細に觀察すれば、此處に一の嚴然たる勢力あらず、たゞ叫び聲、うめき聲、腕力、脅迫などの暴を以て支配せらる、所云る一揆政治なり。

あゝ、一揆政治（モップ、ルール）。我國の万事は殆んど一揆政治を以て決せられんとす、人は云ふ、法律政治は輿論の聲に從がひて定まると、然れども今の輿論は何によりて定まる乎。眞理を確認するものゝ意識、輿論の源となるにあらず、正義を嚴守するものゝ良心、輿論の源となるにあらず、たゞ万人の我儘互ひに優勝劣敗して、最大の我儘最后に輿論を造る、それ今の輿論は我慾私情の結晶なりと云ふとも尚ほ過言にあらず。其れ、今の大支配力は一揆のみ。

佛蘭西の革命を見よ、自由の夢は革命を以て醒り、革命の實は遂に一揆政治を以て結局となしぬ、而して一揆政治の結ぶ所ろは、天下の大亂離のみ。吾人佛國の成敗に鑑みて深かく今の我國を憂ふ。もし此まゝにて進みもて行かば、邦家は大ひに亂れ、道義は全く地に墜んとす。此に於てか、シーサーが羅馬の自由將に横逸せんとする時に出でたる如く、クロムエル、ボナパート等が、英佛革命の后ち大壓制を施こさんが爲に生れたる如く、一大專制王を戴だくにあらずば、遂に治安するとなからんとす。一旦代議政の民となりて、自由に食傷し、再たび、專制の治に反りて束縛を受け、我慾を他の壓力によりて制し、以て漸やく良民たらんとするに至りては、吾党の耻辱之に過ぐるものあらざる也。左れば、もし此まゝにて進まば、日本は再たび、大壓制家を必要するの時機に到達すべし。ジヨンロード云はく、一揆政治の末期は、專制政治を以て終ると。我國今后の景勢亦た將に此の如くならんとす。果して然らば、所云る自由を擴張したる新政度は、偶たま以て、自由の進路を傷害したるに異ならず。眞とに自由を愛するものゝ痛哭して止まざるの日あゝ將に來らんとす。安んじて再たび專制政治に反らんか、絶念して一揆政治の成り行をを放觀せん乎。今や實に大憂沈思すべきの時なりとす。

殖民論（下）

移住者のホーム

殖民策に關し、世人が大ひに失念する所ろのものの第二は、移住者が家族の事なり。思ふに移住者に好きホームなくんば良殖民の大策到底成功すると無けん。

佛蘭西人は感情に富み、一時激發して輕々しく遠征す、之を以て、亞米利加、印度、支那などの殖民は、最初佛蘭西人のみ多かりける。左れど彼等元來樂しみを家内に求むるとを知らず、外に浮かれて劇館舞踏に歡こびを迎ふるの習慣なれば、茫々として草茂り砂漲ぎるの新移住地に斯る樂しみを貪ぼると能わず、感情冷却して雄志やゝ厭きを生ずるの夕べは、遥かに故郷の樂しみを想起して慕念禁じがたく、則はち蹶然辛苦の實を棄てゝ故國に歸らんとするの情あり、此の故に佛人は到底久しく殖民地に定居すると能わざる也。英民は然らず、彼等初めより容易すく動かず、然れども動けば必らず希望の地に達し、其地を以て第二の故郷となす、又容易に此より動かざるなり、而して彼等が第一の樂しみは、其家内にありて家の外にあらず、故に彼等が移住するや其樂しみを荷ふて移る、其移れるの地は亦た樂しみを荷へるの地にして、四面寥々の荒地、尙ほ和樂團欒の愉快あり、其到る所に古郷ありて、亦た父母の國を慕ふとを要せざる也。此を以て、英人の殖民地は久しうして榮へ、根基深くして復たび衰ろふるとなし。昔し佛人が全盛の地は今ま悉とく英人の手に歸す、見よ、米國、印度、支那に於ける、獅の旗何如に勇ましきぞ、而して三角旗何んぞ色なき。

夫れ、佛人が容易に國を去るは、國に良家族なきが故なり、去つて移住したるの地に安んじ難きは、亦た其地に良家族なきが故なり、英人が輕々しく國を去らざるは、國にホームあり、ホームの愛彼輩を動かさゞるに由る、一旦出でゝ他鄕に移り、他鄕を第二の故國として亦容易に動かざるは、之にホームを移したるに由る。夫れ、故國を去りて万里以外に移住し、望を未來に掛けて、足を未だ知らざるの地に投ず、固より凡ならざるの雄志なり、如此き雄志あるものは、亦た常ならざるの感情なくんばあらず、行いて天くもり地枯れ一望灰氣滿々たる新移住地に居す、多感多情の人何を以て能く其心を樂しますとをせん、此に於てか、酒に溺れざるものは、色

に耽り、以て漸やく孤寥無味の境界を忘れんとすらん、此れ人情の弱點に於て免かる可らざるの事とす。此時に際し、若し家に眞家族あらば、風荒れ砂飛ぶの新耕地も、戶內に靄々たる和樂あり、以て新天新地を現ずるに足らん。

左れば、移住民は大抵家族を同伴せざる可らず、而して其家族は必らずや好々のホームあらずんばある可らず。移住民たるに適する最大資格の一として、彼に眞家族なくんばある可らず、之れ殖民に從事するもの、決して忘るまじき一大事となす、而して今や世人大抵之を失念す。黑田開拓長官が北海道を開かんとするや、先づ女秀才數名を米國に送りて留學せしめぬ、志望蓋し移住民間の女風を善導せんとするにありつらん。果して然りとせば之れ非凡の卓見と云ふべし。

結論

思ふに、殖民政策は、今後我國の大勢を一變すべし、之なかつせば、國民改進の見込極めて乏し。夫れ、日本の人民は元來殖民的の民なり。日本の地南北に長くして素と殖民に宜し、地形亦た殖民的なりと云はめ。あゝ、天は日本人に命じて大ひに、海外に移住せしめんとする也。

雜錄

救世軍を訪ふの記（上）

眞相を知らんと欲せば內面の觀察を要す、側部外貌の評言は殆んど効なきなり。救世軍の一隊將に英國社會に一大勢力を形成せんとす、然れども彼等は如何なる組織を爲すか、彼等の內狀は果して如何、其日々の運動は如何、是等の問題に至つては未だ人の明言せざる所、故に內部の眞狀を公然世に知らしむるは無益の事に非ざる可し。此處に思ふ所ありて一婦人を撰び、之を行て以て視察を遂げしめ、其視察する所なりとてパルマルブッヂエット新聞に見ゆ、大意は即ち左に記するか如し。視察者の談話の如く原文に記す、譯亦之に從ふ。

ブース氏の說教

始めて妾が救世軍の集會に臨席せしは本年一月第一日曜日の事なりき、時にゼチラル、ブースの說教ありて、聽衆堂內に充滿し、後れし人は入る能はざる程なりき、人々眼光をブース氏に注射して謹聽せり、氏の烱々たる双眼、度に適へる躰

度、論述の整ひし事等一として衆の注目を惹かざるものなかりき。説教終りて後ち氏は會衆二千有餘人の内老衰の者二十名を留め置き、悔改して救濟に入るべき事を説きぬ、會衆散ずる頃、年齢未だ少き一女隊亦立つて人々に對話して救濟の道を語りぬ。

狂妄信者

一週日の間妾は救世軍の集會に出席せり、信徒皆熱心にして狂妄に近し、故に會衆者鋭意をあらはす、悔改者の證言を述ぶるあり、音樂を奏するあり、水曜日曜雨日は集合者絶叫するの聲のみにて、時に拍手の音、讃美の聲聞えぬ。

證言の例

あまたの人集りしが其内數人の例を擧げん、白髪の一老人あり、祈る時亂妄の言語を以て身の罪惡を責め、悔改の意を示せり。亦仕立屋の手代なる一婦人あり、同じく悔改の言を述べたり。矮軀垢顔の一女、破廉恥なる者ありき大ひに酩酊してありしが時々會場を騒がしぬ、ある土曜日の事なりき、此女は甚しく酔ひ、人の悔改を爲す毎に聞くに忍びざる言語もて之を妄評し、亦は聲高く咳嗽をなし、或は前の椅子を蹴る抔、狂亂狼藉至らざる所なかりき、其傍らに一人あり、證言を述べよと呼ばれしが直ちに立て述べ、終りに銃砲を發火し此會場に妄禮不敬の者ありといたく罵りぬ。次で數人の青年女子代る〳〵語る事あり、突然壇上に於て砲聲轟きしは是なん閉會の合圖なりき。此に於て女隊は壇上の一端に列を爲し、男子の一隊亦之に對して列を作れり。

大將及び從卒

兩列の間に大將と二人の副將と立ちぬ、大將は愛國の美少女双眼光り淸く、才能に富む、人を待遇するに巧みにしてよく自ら經驗せし事を語り、時としては滑稽を云ふ、此女常に戶外の働きに奔走する故遇ふて話するの時少なし、救世軍の人多くは若年にして永逝するは其勞力の過分なるが故とは、此大將なる一女子を見て知らる。副將之に伴ふて或は讃美を歌ひ、或は祈りを爲す、檀上に立てる二三十人は是即ち從卒にして、救世の爲めに戰ふべき者なり、彼等容貌快樂げなれども、疲勞に堪へざるが如く見ゆるものもありき。

支給の方法

彼等が日々、衣食を支給するの道は、「食費箱」と記する内より

得るのみ、會衆者は少しの金を此箱に投す、更に之を他の箱に集めて家賃、租税、薪炭、瓦斯等の入費に充て、其餘は大將と副將兩人の給費に充つ、三人各一週に五シルリングを受く、從卒に至つては女隊は食費を給せらるゝのみ、男隊は給せらるゝ所なし、彼等多くは富貴の家に屬す、例せば一貴女あり、日曜日の集會に五人の下婢を從へて臨席せりと云ふが如し。

救世軍の日曜日

救世軍は日曜日を祈禱に費す。午前七時に跪拜あり、一時間つゞく。十時に戸外の集會あり。十一時に會場に集る。三時に懇話會あり。夕刻に祈禱會あり。妾嘗て朝の跪拜に列しぬ。歌をうたひ、證言を述ぶ或人は寒氣に堪へざるが如く人々見えぬ、亦獨眼者あり、寒さに凍へたるさまにて群集の内に立ち「救世軍の志望を翼賛するが故に余は此に來れり、然らずんば家にあり暖室に在り、火を擁して居るべかりしなり」と云へり、妾は懇話會に出席せず、夜の集會に出でたり、此處に少女を伴ひ來れる青年多くあり、聞き惡くき言を云ひぬ。

或日の集會に於て

例の如く多の人集りき、副將等先きだつて祈り且讃美を爲し、大將なる人自の經歷を語りぬ、此時迄に二十有餘の軍隊(宗教上の運動を爲す人を云ふ)を組成し、各地を遍歷し、幾多の困難を經、或は衣服なく、或日迫害せらるゝ事ありきと述べぬ。

字を知らぬ詩人もがな

愛山生

近頃文人先生雲の如く出で給ふて名作日々に新なり、而して御口釋も亦中々盛なり、ヤレ想、ヤレ韻、誰は何と言た、誰は堂論じた、田舍者は目が廻る。一躰鬼の面かぶらねば驚かぬ世の中、我は左樣考へるでは通りが惡るく是非アヂソンが堂で御座るスウィフトが斯で御座ると云ねばフ、ン御尤と恐入らぬ世の中、今の文學者はトント古の考證家の樣なり、大福帳、當坐帳、色々の帳面を捜して、多量の「コーテーシヨン」で白痴を嚇した昔の考證家を圖らざりき文學隆盛＝島田三郎氏には叱られるかも知れぬが＝の今日に見んとは。巢林子を學んで巢林子たるを得べくんば巢林子を學ぶに由なかりし巢林子は果たして何人を學んで巢林子たりしや。シヤーキスピーアを學んでシヤーキスピーアたるを得べくんばシ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

ヤーキスピーアを學ぶに由なかりしシャーキスピーアは果して何人を學んでシャーキスピーアたりしや。勿論巢林子空中より生れず、シャーキスピーア天際より落ちず、皆前賢の糟粕をなめたものには違なけれど、其糟粕を化して黄金珠玉としたるは即ち巢林子とシャーキスピーアの手柄なり。身が辨慶になれば七道具自然につかへるなり、辨慶ならで七道具つかはんとするはチト蟷螂に斧なり。

巢林子の文千變萬化、勇士となり美人となり、富士の裾野の御狩屋に雨夜松明を照らして情人の迹を追ひし虎となり少將となり、千辛萬苦ヤットのこと大佛供養の曉に俱不戴天の仇なりける大頭の鎌倉殿を刺さんとせし惡七兵衞景淸となるとも、ツマリ巢林子手中の人形なり、之を用ゐる自由自在也、吝な猶太人サイロックとなり、雄辨家ブルタスとなり、美人アーン、ブーリンとなり、ミラン公魔術遣ひプロスピロとなるとも、ツマリスタツホルト、ラン、アボンで生れた秀才の夢あり。此人にして始めて此作あるべし。立派な宮居も苔むした一の廟を飾る爲めの者じや。うつくしひ虹は只日光の反射作用なり。色々の名作もツマリ一心の鍛へ上た者なり。杯の流れ寄る溪川を溯る勇氣が無ければ桃花流水の仙境には達し兼るぞや。眞似で眞物になれるならば市川團十郎はトウニ德川家康になつたろふ。大鵬は容易に飛ばず、心の脩行が肝腎なり。ヤレ西鶴。ヤレ自笑、シルレルじや、ゲーテじや、シッケンスじや、スコットじや、何じや蚊じや、よして下され。

外國の模樣一時流行り、うつくしひ顏に網を打たれた束髮の孃樣に隨喜の淚こぼした日本人も浮氣なもので、近頃はからりと變り「メートル」論に國粹論の飛出る樣になつたのは誠に難有淚のこぼれる程の次第、ケレ𪜈是は政治社交上のこと、流石に文學の世界は矢張り魯西亞文學、獨乙文學、佛文學英文學、など丶皆々しやれて居られる。それの反動と云ふ譯でもあるまいが元祿文學とか云ふ意氣な、而してスチたものも大分珍重されるが、同じ人形に色々の衣裳つけても矢張一ツ人形じや、蝶わげの孃さまも花帽かぶつた「レデイ」も、襷掛の阿三どのも、衣裳かはれば見へかはる計り、眞似を百年遊ばしても眞似は眞似なり。黒人の皮を白く塗る法は御坐るが、白くする法は御坐らぬ。矢張り眞似を止めて自分流が一層よござる、百年の後にチヨコザイの惡童が有つて君が他

附録女學

女學雜誌第二百五十七號附録
明治廿四年三月廿一日發行
定價四錢

車の轍

ひさご

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

車の轍

ひさご作

近ごろの小說家と云ふもの、或るは飜譯し又は實事を寫しなどして、人に己が想像の豊かなる如く示さんと欲す。此「車の轍」は、妙齡未婚の女秀才が手に成れり。固より自らの經驗にはあらず。又人の知れる限り、未だ嘗て斯る實事あらず。われ二つ乍ら確かに知りて、之を讀む人に固く保證す。一篇流るゝが如き文字、下に常ならぬ理想を存す、そは女史が學識の高き故なり。結構の趣きに至りては、悉とく是れ小說なり。

巖本善治識

たゞなつかしきは夫、戀しきは兩親、操だにかはらずばとたのめしもかひなく、我は早こゝに五とせの春秋を過してよはひはたちを越ぬ、心から色香失せにし垂櫻の人にはすさめられ我は我よに厭きはて、かしらこそ剃らね、經こそ誦さね、浮世のさが野にすみ染のありし尼御前にもおとらじと堅固なる心たゆみしなけれど、今日迄も思ひし事はいすかの嘴とくひちがひもて行を、人恨めしく我あさましく、胸はりさけ腸をたつ心地して、神の攝理偏頗もやなどしらず〳〵愚痴の心に引もどさるゝ事しば〳〵なり、されど又おもへば流るゝ筧の水も一度にごりて又濟きにかへる月の光りも浮雲に掩はれて後更にあきらか成とぞ、人もしかぞあるべき、妾朝毎に鏡にむかへば、うきにおとろへし姿いちじるしくそゞろに涙催ふさるれど、水の如く濟く、月の如く、明らけく鏡のごとく、曇りなき胸の中うつさんものなきこそ、かなしけれ、猶ひたすらにたのみをかくるは人の心の鏡なるべし、これにうつさんは水くきの跡ならずして何によらんかくおもひつきて筆のまに〳〵かき出し身の上の物語、人生僅か五十年てふに僞りなくば、妾はや半近くあり經ぬ、心よはりおもひに沈む身のまして常なきよをいかでたのまん、わらはあらずなりし後、里の子のさがなき口のはを經て、かの人々の耳に達する事もあらば、苔むし花かれし田中の墳墓に、一點の涙の露たむくる人なからずや

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、いで其物語をこゝに。
今日は十一月の十二日なり、はやかの日は近づきぬ、兩親はけふしも調度買とゝのへんと出たまひぬ、妾は一人部屋におりて新らしき簞笥の引出しより、人々の祝ひくれし品々數多出してうちみる所へ、障子引あけて松村てふ我家の食客入きたりぬ、この男我父と同じ縣の者にて、父の竹馬の友の子なり、おさなきより我家にきたりて今は大學へ通學おこたりなし、我兄は英國に留學の留守なれば、ことに松村にしたしみて學校へ行きし頃は、この松村に下讀など手傳ひもらひて、二なきものにおもひ、下女などの末には殿樣に成給ふ御方おろそかになし給ひそなど、なぶらるゝもうれしく、萬心づけてつかへしかば、かの方にもへだてなくまじはり給ふ、

妾「松村さん學校は、

松「休みました、

妾「ナゼ、

松「少し齒がいたかつたものですから、

妾「又いけないと、この間のケレウン御つけ遊ばせナ、」私し仕舞つて置ましたヨ、けふあなたの方へ御渡し申しておかうとおもつて、

夜具へ入殘りたる大ばんわた、少しつみとり、藥蘸して手にわたせば、

松「よしませう、つけると御咄しが出來ないから、

わらはは心付たり、今二日經ば、かの方へわたましせん身、今日は種々の物語せんとてきたれる成と、かく心付て、半巾手早くしまひ、火鉢をへだてゝ向ひ坐しぬ、妾は下をむきて、埋火の灰を火箸もて落しつゝ、手持ぶさたにおれば、松村はゴム製の煙草入より、トルコ割煙草つまみ出でゝ、帋に卷出ぬ、かゝる所へ、下女盆に盛たる蜜柑、器にうづたかき菓子茶盆もそへてもてきぬ、松村うけとり、妾が前へ進めて、

松「心許りですが、御好だから、さつきかつてきました、

今更深切なる人の心に感じて、こたへもせず、涙ぐ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

みぬ、きのふ迄も學校の門内に、鬼わたしなどしてかけあるき、家政の事は講義に少し聞しのみ、裁縫も人形の衣物、繻絆三ッ許縫しのみ、赤きリボンに油けなき毛結ひさげ、子供にて人にもゆるされ、妾もしかおもひしものを、切ある懇望によき口なればと、父君のり氣に成たまひ、約束とゝのひしは、某會社の長にて、金満家の聞へ高き人なり、妾も夢のやうに、嬉しともかなしともおもはず、母はかの方にては、三度目の嫁といふに、とても不相應ありと、少し懸念せらるゝ所なきにあらねど、他に思ひかへ給ふ所ありてか、いと／＼うれしげにみえ給ふ、松村もうれしげにみゆるがなにとなくつらくはづかしく、しばらく、無言の儘にゐたりしが、松村烟をフッと吹出して、

松「來年は熱海へ御同行も出來ません、卒業後歸省して冬迄ゐませうとおもひ升から、歸りに一寸參りますが

妾「サウ／＼來年はあなた文學士手塚さんは醫學士に御成遊ばすのネ、御祝にはお二人とも沓下を絹糸入れて編んであげる積りでしたつケ、忘れずに上げますヨ、そうしてあなた咽喉がわるいにそんなに烟草めしあがつて御醫者がわるいといつたじやァありませんか、

松「エヽ度々の御忠告でありがたう、今日は終りの御忠告でせうから、キットちかつて御言葉を守り升、

かゝる所へ西日さす障子に人かげうつりて我家へ親しくいで入する手塚といふ男、學校の歸りがけなりと入來りぬ、手塚は色白く頰のあたり豐かにして愛敬ある顏立なるのみか、世才に長けたれば、松村と同じく父愛して學費の幾分かを助け給ふ、妾も又親しくなしておさなきより共にへだてなく遊べど、松村の淡泊なる卒直なるには似ず、フト心ゆかぬ人なり、と心付てこの頃よりうちとけては物語りもせざりき、手塚は松村とわらはのある時はいつもの愛敬ある顏にいはれぬ色あらはるゝが習ひなり、けふも眉のあたりしかめて、

手「歯痛みだといつて、御浜さんと菓子をくつたり、こんな籠つた部屋へは入つて、…………

妾いつもの様子しれば、心やはらげんと立あがりて両手を肩にかけ、坐はらせながら、

妾「あなたの好な羊羹めしあがれ ロ…………

「手塚はそこに坐して、前の言葉の連絡忘れしにや、妾にむかひて片頬に笑をふくみ、

手「社長の奥様、さすがめつきり御世辞が御上達です、アハ…………ちがつたもんだと又放笑す、

かゝる事いふはこの人の持前なり、馴れてはほづかしともおもはぬを、拍子ぬけたりといふ様子にて、

手「ナア松村君子供同前な者を、早婚の弊を主張する於ちさんに不似合じやアないか、廣い世界に外の人がないのじやアあるまいし、殊に螢雪の勞繼ならずしてたれかなぐさめん、日夜黽勉するも卒業の暁否かの式擧行の日をまてばなりといふ人が、こゝにあるじやアないか

松「失敬な事をいひ給ふな、

手「何、何失敬な事があるもんか、そりやアマアそういふ人も数多あるだらうといふ咄し、サ、イヽサ、無財産の書生輩より、金満家は、腕の力は人にしれないから、しかし君の今日の休みは、めづらしい、加藤が何か原因があるだらうといつてたッケ、

松「原因は、歯が痛かつたのだが、お浜さんとも一日はなさうとおもつて、…………

妾は、心にもとめず、この咄しを聞ゐたりしが、フト松村をみれば、又候烟草入に手を入れて、つまみ出さんとする所なりしが、わらはの心付しに心付きて、もろ共にほゝゑむ、際うしろの方にがらりと障子のあく音せしは、手塚の決然と坐を去りしなり、

この日より、三日めの十五日に、かの方へわたまししぬ、夫は初老に近ければ親のやうにもおもはれて、家にありし時よりは、子供にて其年は過しぬ、あくるとしは十八にも成ぬ、萬家事向の事、賄ひ給し厄介の叔母、客の接待などより、少しづゝ金の出納をゆづり給ふ、妾は丸髷に結かへ、われながらをかし

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

きやうに、おとなびたれど、姿こそあれ、としも未だ若く、まして人並よりはおさなき生れつきなれば、何事もよくなしえず、今より思へば、夢中にておばにあてつけらるゝも、よくは思ひ當らぬ不甲斐なさに、殆あきれ給ひぬとおぼしく、柔しき夫も、折にふれて心づきなしと叱りこらさるゝやうに成ぬ、里方の人々も、まれにとひくるのみにて、うきを訴ふる人なく、こあたの家内不殘、この頃はこわくおぼえて、一間にのみ閉籠り、又おば君によび出さる、夫一日風邪の心地とて、新學士の手塚に診察を乞はれしより、いつしか親しく成給ひて、ともに遊びに行て、かへられぬ夜もしばしばに成ぬ、その翌朝は、わが落度のやうにおばの遠廻しにしかり給ふもつらく、秋風の吹立頃より、心地くるしくて、床に打伏しぬ、手塚寒きうちは熱海へとしばしば行かるゝ故と夫をときすゝめしにより下女二人ともあひて、ゆくとをゆるされ、妾出立しぬ、なれし土地なれば、心やすく氣がねする人なく、馴ぬ針仕事に肩凝り、金の

出納に心配する事なければ、心地もすぐよかに成ぬれど、もしやと下女に心づけられて考がふれば、我身何となくたゞならぬやうなり、いかにせましと胸つぶれたれど、其時しか思ひしのみにて、深くも心にかゝらず、去年松村のいひし事あれば、もしこの地にて面會せん事もありやと、日にいひつゞけて待わたりぬ、一日の夕方、下女の案内に入來りしは松村なり、ヲヤとかけ出たれど、あとは涙に先だゝれぬ、松村もうれしげに、久々なりとて、國元の家のわがおばのかはらぬ有樣など、うちとけてかたり、俄に勢つき一週間計、この家の下坐敷にやどりぬ、て、妾下女一人供として、松村と毎年しれる所々見あるくをもしろさ、夫と相乘の馬車駈りて、物見遊山せし時にくらぶべくもあらず、湯の涌出る所、けふも見てうちつれ宿へ立歸る、あなたよりきたりしは手塚なり、手塚は、下女の報知により我身のしかるかいなやを見さだめにきたりしなり、とあとにて聞ぬ、其翌朝、手塚もかへり、松村も夕汽車にて歸

京しぬ、今更に淋しさ加はりて、一週間あまり過すうち、里の方はいふ迄もなく、何となく心すゝまぬ我家もこひしく成、夫のもとへかへりたしといひおくりし夜、里の父より書状きたりて、おもふ子細あればゝしばしおばのもとへ行て、二人の下女は此方へ送り、此方より更にむかひの人を遣はさんといひこしぬ、兎に角あきはてしこの地をさり、生國のおばのもとへ行かんことうれしく、直に出立ぬ、おばは我家を受継て、所にならびなき豪家と、今猶名たかし、行て父よりの書状にてまゐりぬ、様子しり給はば聞かし給へ、といふに、答への代りに、これ見よ、とさし出し給へるは、一枚の書状やうのものなり、うちひらけば、夫の手にして、妾熱海にて不貞の行状ありし事、證人ありて分明なれば、離縁申入るゝとの状なり、あまりの事に涙も出ず、おばの顔うち守れば、ハラ〳〵と涙を流して、一人娘を翫物にせられし父御の無念、いか許りぞ、眼もうとく成給ひしといふに、委細こまかく別紙に書送り給ひぬ、熱海にて松村に出會しが、御身の不幸なりしならめ、松村一め見し人には、かゝる疑ひは思ひもよらず、まして御身の從弟女、我娘のとし子と約束、この度とゝのひしものを、たれ人の水さして、かゝる事に成行しか、總領の生れは思ひたりぬといふなれど、いかあればはしたなき行ひして、かゝる名はおひしぞ、おさな馴染に心とけて、先方の下女共に告口されしか、としゆかぬ故とはいへ、萬事拔目ありて、先頃より聞ば、先方の家事向きをも、とり廻しかぬるといふいくぢなきにも、ほどこそあれ、たゞあきられ、家風にあはずとて、かくならば又詮すべもあるべきを、我爲にも、我兄の爲にも、大事の〳〵の一人娘、子供としりて、無理にひきとり今更に汚名きせておひ出すは、先方も先方なり、おひ出さるゝ御身も御身なりと、しどろもどろにすゝりあげつゝ、恨み泣給ひしが、又言葉をあらため、されど父君も男なり、子をみ給ふ眼は老てこそあきらかなれ、聞ばたゞならぬ身に成ぬとぞ、萬事父君にまかして、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

濡衣をほす日わらんを待給へ、心のどかにして、身にさはらぬやうなし給へと、また蟹所にひかへし下女よび入、對面して、その趣をかいつみてこの度は嚴然といひ聞かし給へば、二人ともにしらぬ事なればかさめ〴〵となきて、あまりの事とうらむも、妾をおもふ心淺からずとうれしく、五六日引とめて、東京へ下男つけてかへしぬ、ともに行身ならましかばと歎きしが、この頃よりフト悟る所ありて、今迄の心ひるがへし、おも〴〵しくなりて、この出來事につきても、さのみはなげかず、子供らしき心失はて、今迄文かく事もよくせざりしかば、おばに乞て手習などし、祖先よりの書物など取出でゝ讀はじめぬ、おば、妾にあきれはて、我られひをうれふる事一ツしらず、こゝに長くもある身かのやうに落付て、讀書三昧、又先方へ再度行たる時には、いかにせんとすらんといひこらされしかど、おばの望みはしるしなく、月を經て先方にては、又某華族の姫君、むかへたりと聞えぬ、これらの落膽よりして、父母と

もにあしき風に罹りて、引つゞきよをさり玉ふ、遠くはなれゐて、俄の事なれば水一ツすゝめずして、わが上の事のみに御心なやませし、不孝の身、空おそろしく、ひるよしなき濡衣の袖ぬらしそへて、日を送るうち、心地なやましさそひて、八月の死躰を分娩しぬ、やみより暗におくりし我子は更之、妾も日かげ者にて世を過す、兄は外國より父母の存命中歸京して、松村と共に、某省の書記官拜命して、名譽高けれど、再度上京せん心もなく、里の子供等をあつめて、本などを、敎しふるを、たのしみになすうちも、手塚は絶ず文おこせて、かゝる身に成給ひしも、かれが爲なるを、なほ松村に心ありてか、薄情不人情の夫に操たてゝか、未だ獨身にゐたまふこそ心得ね、君が爲には、さま〴〵心盡せし人をおきてなど、ねもごろにいふ、いさゝか心にあたる節あれば、口へこそ出さぬ、わが身の上へ、うきとうき事あつめしもかれあり、うきが爲、我子の失せにし敵もかれなり、うきにかれし心に、舌たるき言かけ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て、なつけんとする心のにくさ、くる文は皆ズタ〲に引さき捨ぬ。凡夫盛んなる時は、神たゝらずと聞ど、わが清き心に愧死さする日あるべし、さらばわが濡衣もあと旮く干て、よになき父母の心やすく、兄もおもてを起すべし、妾人より鈍き性質とて、萬事心淺く、父母のすゝめ給ふまゝに、見あひもせで嫁入せしも、富貴なりといふに、うら若き心の動きし故なり、學問もなく、何一ッなすゝべしらで、美るはしき衣服などの數多出來し事うれしく、樂しみにせし婚姻の日は今日迄の不幸をかひし日なりき、人の噂も七十五日といひし例、しられて、再縁申込人もあれど、今はさる事、弗々思ひもかけず、さらでも間親たしからざりし夫婦の中に、水さして濡衣きせし人の手にて、此濡衣又干さん日迄は、松村とも交りをたちて、門田のそほづを友とし、苗代水をわが心とすむにも、賤が夕顔棚の樂しみをみて、袖に露置夕も少なからず、うつゝのおもひは、夢の跡おひて、都の空にはせ、筧の水の音に、おどろく曉もしば〲なり、慈愛深き親は、慈愛に眼くらみて、しらず〲我子の心を枉ぐる事有、そをあきらかにいひゝらきて、やさしく反省を乞ふは、子のつとめなり、この務盡さんには、よく〲學問して是非辨まへらるゝ年頃にいたるを待べし、後悔は人の最大不幸なり、わらはの家は、濱松驛にてこゝにこし時の車の轍、今猶深く地に印して消ず、心せよ、よの乙女子等、ころばぬ先の杖つきて、又このわだちに落入らざらん事を。

本回の附録は八頁となし常より少しく減じぬ。



前回の多かりしと后回の多かるべき故なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

東京麹町區下六番町六番地　女學雑誌社

發行兼編輯人　巖本善治

印刷人　堀口庄[illegible]

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

附錄女學

女學雜誌第二百五十七號附錄
明治廿四年三月廿一日發行
定價四錢

車の轍

ひさご

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

車の轍

ひさご作

近ごろの小説家と云ふもの、或るは飜譯し又は實事を寫しなどして、人に己が想像の豊かなる如く示さんと欲す。此「車の轍」は、妙齡未婚の女秀才が手に成れり、固より自らの經驗にはあらず。又人の知れる限り、未だ嘗て斯る實事あらず。われ二つ乍ら確かに知りて、之を讀む人に固く保證す。一篇流るゝが如き文字、下に常ならぬ理想を存す、そは女史が學識の高き故なり。結構の趣きに至りては、悉とく是れ小説なり。　巖本善治識

たゞなつかしきは夫、戀しきは兩親、操だにかはらずばとたのめしもかひなく、我は早とゝに五とせの春秋を過してよはひはたちを越ぬ、心から色香失せにし葉櫻の人にはすさめられ我は我よに厭きはて、かしらこそ剃らね、經こそ誦さね、浮世のさが野にすみ染のありし尼御前にもおとらじと堅固なる心たゆみしなけれど、今日迄も思ひし事はいすかの嘴とくひちがひもて行を、人恨めしく我あさましく、胸はりさけ腸をたつ心地して、神の攝理偏頗もやなどしらず〳〵愚痴の心に引もどさるゝ事しば〳〵なり、されど又おもへば流るゝ筧の水も一度にごりて又澄きにかへる月の光りも浮雲に掩はれて後更にあきらか成とぞ、人もしかぞあるべき、妾朝毎に鏡にむかへば、うきにおとろへし姿いちじるしくそゞろに涙催ふさるれど、水の如く澄く、月の如く、明らけく鏡のごとく、曇りなき胸の中うつさんものなきこそ、かなしけれ、猶ひたすらにたのみをかくるは人の心の鏡なるべし、これにうつさんは水くきの跡ならずして何によらんかくおもひつきて筆のまに〳〵かき出し身の上の物語、人生僅か五十年てふに僞りあらば、妾はや半近くあり經ぬ、心よはりおもひに沈む身のまして常なきよをいかでたのまん、わらはあらずなりし後、里の子のさがなき口のはを經て、かの人々の耳に達する事もあらば、苔むし花かれし田中の墳墓に、一點の涙の露たむくる人なからずや

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は、いで其物語をこゝに。

今日は十一月の十二日なり、はやかの日は近づきぬ、妾兩親はけふしも調度買とゝのへんと出たまひぬ、妾は一人部屋にありて新らしき簞笥の引出しより、人々の祝ひくれし品々數多出してうちみる所へ、障子引あけて松村てふ我家の食客入きたりぬ、この男我父と同じ縣の者にて、父の竹馬の友の子なり、おさなきより我家にきたりて今は大學へ通學おこたりなし、我兄は英國に留學の留守なれば、ことに松村にしたしみて學校へ行きし頃は、この松村に下讀など手傳ひもらひて、二なきものにおもひ、下女などの末には殿樣に成給ふ御方おろそかになし給ひそなど、なぶらるゝもうれしく、萬心づけてつかへしかば、かの方にもへだてなくまじはり給ふ、

妾「松村さん學校は、

松「休みました、

妾「ナゼ、

松「少し齒がいたかつたものですから、

妾「又いけないと、この間のケレウン御つけ遊ばせナ、」私し仕舞つて置ましたヨ、けふあなたの方へ御渡し申しておかうとおもつて、

夜具へ入殘りたる大ばんわた、少しつみとり、藥瓶して手にわたせば、

松「よしませう、つけると御咄しが出來ないから、

わらはは心付たり、今二日經ば、かの方へわたましせん身、今日は種々の物語せんとてきたれる成と、かく心付て、半巾手早くしまひ、火鉢をへだてゝ向ひ坐しぬ、妾は下をむきて、埋火の灰を火箸もて落しつゝ、手持ぶさたにおれば、松村はゴム製の煙草入より、トルコ刻煙草つまみ出でゝ、帋に卷出ぬ、かゝる所へ、下女盆に盛たる蜜柑、器にうづだかき菓子茶盆もそへてもてきぬ、松村うけとり、妾が前へ進めて、

松「心許りですが、御好だから、さつきかつてきました、

今更深切なる人の心に感じて、こたへもせず、涙ぐ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

みぬ、きのふ迄も學校の門内に、鬼わたしなどしてかけあるき、家政の事は講義に少し聞しのみ、裁縫も人形の衣物、縮絆三ッ許縫しのみ、赤きリボンに油けなき毛結ひさげ、子供にて人にもゆるされ、妾もしかおもひしものを、切なる懇望によき口なればと、父君のり氣に成たまひ、約束とゝのひしは、某會社の長にて、金満家の聞へ高き人なり、妾も夢のやうに、嬉しともかなしともおもはず、母はかの方にては、三度目の嫁といふに、としも不相應なりと、少し懸念せらるゝ所なきにあらねど、他に思ひかへ給ふ所ありてか、いと〳〵うれしげにみえ給ふ、松村もうれしげにみゆるがなにとなくつらくはづかしく、しばらく、無言の儘にゐたりしが、松村烟をフッと吹出して、

松「來年は熱海へ御同行も出來ません、卒業後歸省して冬迄ゐませうとおもひ升から、歸りに一寸參りますが

妾「サウ〳〵來年はあなた文學士手塚さんは醫學士に御成遊ばすのネ、御祝にはお二人とも沓下を絹糸入れて編んであげる積りでしたっケ、忘れずに上げますヨ、そうしてあなた咽喉がわるいにそんなに烟草めしあがつて御醫者がわるいといつたじやァありませんか、

松「エヽ度々の御忠告でありがたう、今日は終りの御忠告でせうから、キットちかつて御言葉を守り升、

かゝる所へ西日さす障子に人かげうつりて我家へ親しくいで入する手塚といふ男、學校の歸りがけなりと入來りぬ、手塚は色白く頬のあたり豐かにして愛敬ある顏立なるのみか、世才に長けたれば、松村と同じく父愛して學費の幾分かを助け給ふ、妾も又親しくなしておさなきより共にへだてなく遊べど、松村の淡泊なる卒直なるには似ず、フト心ゆかぬ人なり、と心付てこの頃よりうちとけては物語りもせざりき、手塚は松村とわらはのある時はいつもの愛敬ある顏にいはれぬ色あらはるゝが習ひたり、けふも眉のあたりしかめて、

手「歯痛みだといつて、御浪さんと菓子をくつたり、こんな籠つた部屋へは入つて、…………

妾いつもの様子しれば、心やはらげんと立あがりて兩手を肩にかけ、坐はらせながら、

妾「あなたの好な羊羹めしあがれヨ……

「手塚はそこに坐して、前の言葉の連絡忘れしにや、妾にむかひて片頰に笑をふくみ、

手「社長の奥様、さすがめつきり御世辭が御上達です、アハ………ちがつたもんだと叉放笑す、

かゝる事いふはこの人の持前なり、馴れてははづかしともおもはぬを、拍子ぬけたりといふ樣子にて、

手「ナア松村君子供同前な者を、早婚の弊を主張する於ちさんに不似合じやアないか、廣い世界に外の人がないのじやアあるまいし、現に螢雪の勞績ならずしてたれかなぐさめん、日夜黽勉するも卒業の曉否かの式擧行の日をまてばなりといふ人が、こゝにあるじやアないか

松「失敬な事をいひ給ふな、

手「何、何失敬な事があるもんか、そりやアマアそういふ人も數多あるだらうといふ咄し、サ、イ、サ、無財産の書生輩より、金滿家は、腕の力は人にしれないから、しかし君の今日の休みは、めづらしい、加藤が何か原因があるだらうといつてたッケ、

松「原因は、歯が痛かつたのだが、お浪さんとも一日はなさうとおもつて、…………

妾は、心にもとめず、この咄しを聞ゐたりしが、フト松村をみれば、叉候烟草入に手を入れて、つまみ出さんとする所なりしが、わらはの心付しに心付きて、もろ共にほゝゑむ、際うしろの方にがらりと障子のあく音せしは、手塚の決然と坐を去りしなり、

この日より、三日めの十五日に、かの方へわたまししぬ、夫は初老に近ければ親のやうにもおもはれて、家にありし時よりは、子供にて其年は過しぬ、あくるとしは十八にも成ぬ、萬家事向の事、賄ひ給し厄介の叔母、客の接待などより、少しづゝ金の出納をゆづり給ふ、妾は丸髷に結かへ、われながらをかし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

きやうに、おとなびたれど、姿こそあれ、としも未だ若く、まして人並よりはおさなき生れつきなれば、何事もよくなしえず、今より思へば、夢中にておばにあてつけらるゝも、よくは思ひ當らぬ不甲斐なさに、殆あきれ給ひぬとおぼしく、柔しき夫も、折にふれて心づきなしと叱りこらさるゝやうに成ぬ、里方の人々も、まれにとひくるのみにて、うきを訴ふる人なく、こなたの家内不殘、この頃はこわくおぼえて、一間にのみ閉籠り、又おば君によび出さる、夫一日風邪の心地とて、新學士の手塚に診察を乞はれしより、いつしか親しく成給ひて、ともに遊びに行て、かへられぬ夜もしば〳〵に成ぬ、その翌朝は、わが落度のやうにおばの諄廻しにしかり給ふもつらく、秋風の吹立頃より、心地くるしくて、床に打伏しぬ、手塚寒きうちは熱海へとしば〳〵行かるゝ故と夫をときすゝめしにより下女二人ともなひて、ゆくとをゆるされ、妾出立しぬ、なれし土地なれば、心やすく氣がねする人なく、馴ぬ針仕事に有就り、金の出納に心配する事なければ、心地ゝすぐよかに成ぬれど、もしやと下女に心づけられて考がふれば、我身何となくたゞならぬやうなり、いかにせましと胸つぶれたれど、其時しか思ひしのみにて、深くも心にかゝらず、去年松村のいひし事あれば、もしこの地にて面會せん事もありやと、日にいひつゞけて待わたりぬ、一日の夕方、下女の案内に入來りしは松村なり、ヲヤとかけ出たれど、あとは涙に先だゝれぬ、松村もうれしげに、久々なりとて、國元の家のわがおばのかはらぬ有様など、うちとけてかたり、一週間計、この家の下坐敷にやどりぬ、俄に勢つきて、妾下女一人供として、松村と毎年しれる所々見あるくをもしろさ、夫と相乘の馬車馳りて、物見遊山せし時にくらぶべくもあらず、湯の湧出る所、けふも見てうちつれ宿へ立歸る、あなたよりきたりしは手塚なり、手塚は、下女の報知により我身のしかるかいなやを見さだめにきたりしなり、とあとにて聞ぬ、其翌朝、手塚もかへり、松村も夕滊車にて歸

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

京しぬ、今更に淋しさ加はりて、一週間あまり過すうち、里の方はいふ迄もなく、何となく心すゝまぬ我家もこひしく成、夫のもとへかへりたしといひおくりし夜、里の父より書状きたりて、おもふ子細あれば、しばしおばのもとへ行て、二人の下女は此方へ送り、此方より更にむかひの人を遣はさんといひこしぬ、兎に角あきはてしこの地をさり、生國のおばのもとへ行かんこそうれしく、直に出立ぬ、おばは我家を受繼て、所にならびなき豪家と、今猶名だかし、行て父よりの書状にてまゐりぬ、様子しり給はば聞かし給へ、といふに、答への代りに、これ見よ、とさし出し給へるは、一枚の書状やうのものなり、うちひらけば、夫の手にして、妾熱海にて不貞の行状ありし事、證人ありて分明なれば、離縁申入るゝとの状なり、あまりの事に涙も出ず、おばの顔うち守れば、ハラ〳〵と涙を流して、一人娘を玩物にせられし父御の無念、いか許りぞ、眼もうとく成給ひしといふに、委細こまかく別紙に書送り給ひぬ、熱海にて松村に出會しが、御身の不幸なりしならめ、松村一め見し人には、かゝる疑ひは思ひもよらず、まして御身の從弟女、我娘のとし子と約束、この度とゝのひしものを、たれ人の水さして、かゝる事に成行しか、總領の生れは思ひたりぬといふなれど、いかあればはしたなき行ひして、かゝる名はおひしぞ、おさな馴染に心とけて、先方の下女共に告口されしか、としゆかぬ故とはいへ、萬事拔目ありて、先頃より聞ば、先方の家事向きをも、とり廻しかぬるといふいくぢなきにも、ほどこそあれ、たゞあきられ、家風にあはずとて、かくならば又詮すべもあるべきを、我爲にも、我兄の爲にも、大事の〳〵の一人娘、子供としりて、無理にひきとり今更に汚名きせておひ出すは、先方も先方なり、おひ出さるゝ御身も御身なりと、しどろもどろにすゝりあげつゝ、恨み泣給ひしが、又言葉をあらため、されど父君も男なり、子をみ給ふ眼は老てこそあきらかなれ、聞ばたゞならぬ身に成ぬとぞ、萬事父君にまかして、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

濡衣をほす日あらんを待給へ、心のどかにして、身にさはらぬやうなし給へと、また蠶所にひかへし下女よび入、對面して、その趣をかいつみてこの度は嚴然といひ聞かし給へば、二人ともにしらぬ事なればかさめ〲となきて、あまりの事とうらむも、妾をおもふ心淺からずとうれしく、五六日引とめて、東京へ下男つけてかへしぬ、ともに行身ならましかばと歎きしが、この頃よりフト悟る所ありて、今迄の心ひるがへし、おも〲しくなりて、この出來事につきても、さのみはなげかず、子供らしき心失はて、今迄文かく事もよくせざりしかば、おばに乞て手習などし、祖先よりの書物など取出でゝ讀はじめぬ、おば、妾にあきれはて、我られひをうれふる事一ッしらず、こゝに長くもある身かのやうに落付て、讀書三昧、又先方へ再度行たる時には、いかにせんとすらんといひこらされしかど、おばの望みはしるしなく、月を經て先方にては、又某華族の姫君、むかへたりと聞えぬ、これらの落膽よりして、父母と

もにあしき風に罹りて、引つゞきよをさり玉ふ、遠くはなれゐて、俄の事なれば水一ッすゝめずして、わが上の事のみに御心なやませし、不孝の身、空おそろしく、ひるよしなき濡衣の袖ぬらしそへて、日を送るうち、心地なやましさそひて、八月の死躰を分娩しぬ、やみより暗におくりし我子は更之、妾も日かげ者にて世を過す、兄は外國より父母の存命中歸京して、松村と共に、某省の書記官拜命して、名譽高けれど、再度上京せん心もなく、里の子供等をあつめて、本などを、敎しふるを、たのしみになすうちも、手塚は絶ず文おこせて、かゝる身に成給ひしも、かれが爲なるを、なほ松村に心ありてか、浮薄不人情の夫に操たてゝか、未だ獨身にゐたまふこそ心得ね、君が爲には、さま〲心盡せし人をおきてなど、ねもごろにいふ、いさゝか心にあたる節あれば、口へこそ出さぬ、わが身の上へ、うきとうき事あつめしもかれあり、うきが爲、我子の失せにし敵もかれなり、うきにかれし心に、舌たるき言かけ

て、なつけんとする心のにくさ、くる文は皆ズタ／＼に引さき捨ぬ。凡夫盛んなる時は、神たゝらずと聞ど、わが清き心に愧死さする日あるべし、さらばわが濡衣もあとおく干て、よになき父母の心やすく、兄もおもてを起すべし、妾人より鈍き性質とて、萬事心淺く、父母のすゝめ給ふまゝに、見あひもせで嫁入せしも、富貴なりといふに、うら若き心の動きし故なり、學問もなく、何一ッなすゝべしらで、美るはしき衣服などの數多出來し事うれしく、樂しみにせし婚姻の日は今日迄の不幸をかひし日なりき、人の噂も七十五日といひし例、しられて、再縁申込人もあれど、今はさる事、弗々思ひもかけず、さらでも間親たしからざりし夫婦の中に、水さして濡衣きせし人の手にて、此濡衣又干さん日迄は、松村とも交りをたちて、門田のそほづを友とし、苗代水をわが心とすむにも、賤が夕顔棚の樂しみをみて、袖に露置夕も少なからず、うつゝのおもひは、夢の跡おひて、都の空にはせ、筧の水の音に、おどろく曉もしば／＼なり、慈愛深き親は、慈愛に眼くらみて、しらず／＼我子の心を枉ぐる事有、そをあきらかにいひゝらきて、やさしく反省を乞ふは、子のつとめなり、この務盡さんには、よく／＼學問して是非辨まへらるゝ年頃にいたるを待べし、後悔は人の最大不幸なり、わらはの家は、濱松驛にてこゝにこし時の車の轍、今猶深く地に印して消ず、心せよ、よの乙女子等、ころばぬ先の杖つきて、又このわだちに落入らざらん事を。

本回の附録は八頁さなし常より少しく減じぬ。



前回の多かりしさ后回の多かるべき故なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

東京麹町區下六番町六番地　女學雜誌社

發行兼編輯人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

人の甲着て軍すると笑つても、苦しからずと仰せらるれば其迄の事なれど。

極端子曰眼は迷の入口にして、學問は天才を鈍らし、先例は新案を殺す、秀逸の句初心に多く、天眞の妙文却て山童の口に在り、ナマジヒに學問すればこそ、眞似もしたくなれ、鼻に懸けたくなれ。嗚呼字を知らぬ詩人もがな。

書簡と人の氣質（上）

雲峯子

カーデナル、ニウマン氏の意見

過般モッズレー孃其著はす所の一書を公にせり、其卷首にニウマン氏の書簡あり、こは今より二十八年前氏が其妹君に送りしものなり、其一節に曰く

余所謂らく書簡はよく其起草者の性質を現はし、眞誠の生涯記たるものならん、故に其書簡を公衆に示すは只に其人の生涯を人に知らしむるのみならず、其心情人物をも明かならしむる方法なり、人の傳記を著はす者多くは己が意見もて之を裝飾し、或は其の人物感情等を想像附加す、されど書簡に至つては生涯中折々の實事を記するものなり。

云々と。然り書簡が實事を記するの點に於ては氏が言の如し、されど實事必ずしも信據すべからず、人によりては書簡は眞誠の人物を示すにあらで却へつて大ひに誤解せしむるものなきにあらず、例せばバイロンの書簡の如し、是等しくバイロンの生涯につきて實事を記するものなり、されど之を讀む人大ひに考究する所ろなくんば彼の性情を誤り易し、勿論手紙を認むるに當り、之を作爲せざる人多からん、斯る人にしてわが眞誠の性質を書きあらはし能はざるも多し、是其心に定見なきか若くは文字を自由に書き能はざるが故なり、ボルンースの如きは其書簡中一も其性質をあらはせしものなし、ジヨンソン亦然り、而してルーザーの如く其書簡より其談話集に於て却て其人物のよく現はるゝものあり、コレリッヂに於ても然り、之に由て見れば或は其行爲によつて人物の現はるる者あり、或は書簡にて明かなる人あり、或は談話の際に知らるゝ人あり、亦は他人を批判するに於て知らるゝあり、人に依て同じからず、故に只書簡に於て最もよく知らるゝと斷じ去るは不可なり、却りて書簡は其の起草者の人物と之れを讀む人の間だを隔絶する事あり、故に人物を反射して人に示

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すの明鏡と云はんより寧ろ之を蔽遮するの幕の如しといふの當る事多し、例せばゲーテーの書簡の如し、誰か之を讀みて彼の人物を知り得るものあらんや、然るに彼がイーケルマンとの談話に於ては彼を明らかに知らしむる事多し、斯の如くしてエマーソンの書簡はカーライルに勝り、カーライル夫人は上の兩人よりよく其書簡にて知らる、斯の如く有名なる文人學者にして尚且其書簡に己が本性を現はし得ざるは奇妙の至りと云ふ可し、コレリッヂの書簡は文章徒らに長きに渉りウヲルズウヲルスは議論的に認めぬ、カーライルすら尚其書簡に於ては文章の美を欠きぬ、此に至つて知る吾人は書簡が其起草の性情を現はし能はずとするも尚他に之を知るの方法多くある事を、ニウマン氏に至つては年少しく長ずる頃より早く已に其性情を現はせしとは云へ、他の多數の人々に至つては甚だ難しとする所あり。

第一人の其書簡に於て己れを現はさんとせば先づ己を知り、之を知りて樂しむの心なかる可からず、勿論己れを知り且つ樂むは利己の心にあらず、蓋し利己の心あれば只に其人物をあらはし得ざるのみならず、人をして大ひに誤解せしむるものなり、利己の心を除きて多少己を知り、自ら顧みて樂しむの心なくば、到底書簡によりて其性情をあらはす能はず、ニウマン氏を始めとし、カウパー、チヤールス、ラム、カーライル夫人、詩人グレー、ウヲルトレー、モンテーグ孃、シセロ等の如し、是實例にしてニウマン氏が其著作に示す如く、亦彼のモッズレー孃の著作にて自らを現はすが如きものにして蔽ふ可からざる事實なり、之を要するに自ら其人物思想の發達を喜ぶものにして始めて其書簡に人物を現はし得べき也。

兒籃

米屋の鷄の話し

淺井さく子

或時私の宅へ、出入の米屋が參り升た、其時お米を所々へとぼしましたから、夙と米のこぼれる事に付、感じました故、米屋に申ますに、お前の見世では、鷄を蓄ふて置くかと、尋ねましたら、蓄ふて置くと申升た故、私が申のには、嘸ぞお米がこぼれるから食物に不足がなくて十分だろふと申しましたら、米屋が申ますには、イヽエ見世の鷄は土間へこぼれた米粒は食ませんと申しました、是は奇妙なぜだろふと申ましたら、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

米屋が申には鷄は口が利けませんけれども、盜かた穢ないと か泥くさひとか思ふと見へて盤臺の賣米計りを食べていけま せんと申ました。そこで私は大ひに感じました、元來鳥やに て蓄われて居た時には、一日の中に二度か、三度糀でも播ひ てもろふと、悦んでコッコ〳〵と云ふて、後とを附いて歩き し者が、今十分飽きたると思へば、斯く奢りて土の上のこぼ れは食べぬとは、實に慾ひた者ではありませんか、知覺なき 鷄でさへもかくの如く奢りは増長する者であります、況して や知覺ある人にして若し戒めずんば遂に國をも家をも失ふに 至るは、古今例し少なからぬことです。昔將軍家綱の時代に、老中板倉重矩といふ、名士がありまし た、其士は節儉にして、善道を守りたると見へ、常に自分の 居間に、咬菜と書いてある、額を掲げて置いたと申ます、老 中の樣な、重役を致しましても、其額は其儘に掲げて置きま したら、或人が其所以を問ひましたら、重矩が申まするに、 吾は今富貴なるが故に、侈の心は生じ易き者故、この額によ りて吾心を警むと申ました、又德川家康の家訓の中にも、心 に不足起らば、困窮したる時を思へと、申ました、子供衆あ なた方は、今富貴にて、總てに不足がない時に、よく警め愼 む事を、勉強なさいまし。

文學

池袋清風大人批（東京案山子の屋社中）

雨

、ましはたく煙も軒にうつもれてさびしくそゝぐ雨の音かな
［夕わびしき］
日高みつ子

、むさしびの梢をわたる聲のしてくるゝ山路に雨きほふなり
［聲ものすごきあし曳の］［の背に村雨そふる］
尾崎宮一郎

、降りし日のこと思はせて我窓のさゝはらしけき雨の音かな
［小夜更てひとり文みる］
市村高彦

評。上句何も詮なし添削にて下句の原情出つ

霞

、はるかにも富士の高根を見渡せば霞のうちに見ゆる白雪
［なる］［は影きえて］［雪そ殘れる］
江間たよ

、さほひめの霞の衣たちそめて。のどけき春の色は見けり
［山の姿も］［かりけり］
山口つる

評。さほひめさは春の事なれば別に春をいはぬ方よし

、岡の邊にかすみたなびくあしたには柳櫻もわかたさりけり
［の］［朝ぼらけ］［未だ］［れす］
日高みつ子

評。のの音はいくら用ひてもよしにさかはの後詞はなるべく注意すべし

、大宮の松にかゝりて春霞雲の上にもたちにけるかな
［九重］［よりかけ］［なびくさ］
尾崎宮一郎

、有明の月は殘りて山の端の霞そ春の香ひなりける
［は消行］［にほひ］
安藤たれ子

評。香のにほひにあらす此處光のにほひ也

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

淨瑠璃に對する近世の意見

其一

星川逸民

回想は我の半ばなり、我又斯宇宙と感合するが故に時ありてか宇宙の中ともなる、過ぎ逝かんとする世を暫し駐め、彼は快か、苦か、善か、惡か、互に較べて善きものを造出すは此力なり、否快、苦、善、惡直ちに此幻影なるやも知れず、盖し往にし世の歴然として我に來るは此力の妙なり、彼の天の記録と云へるは此力にやあるらん、

聞く、羅馬の故都に立ちたる學者の瞼より零ちし一滴の涙は遂に有名なる羅馬衰世史を成しぬと、余將た、何を想はん、兵者どもの夢の迹にもあらず、三笠の山の月にもあらず、幼きときの愉快、是れ實に忘しがたき記臆なりき、

余は幼なりし時、夏の長き日を遊び暮らして燈つくる頃は總身に熱の出來るほどつかれ、厨の方にて奴婢どもが夕餉の仕度とて喚めき騒ぐも我家のこととは思はず、程隔りて何事をか爭ひゐるやうに聞きつ、蹌踉として歩みもならぬを、祖父は柔かに余を膝の上に抱き、雙手を余の腋の下より環らして辛くも余の倒るゝを支へぬ、祖母は余の向ひに坐わりて肴の骨など除きて肴よ飯よといふ度に唯喏を便りに仰ぎて受けつ、足るや足らずや余の知る所にあらず、祖父と祖母と暫し爭ふていざといふを合圖にやがて轉ろぶがごとく臥床に入るを常としぬ、

嗚呼無心こそ貴けれ、余は今にても屢々疑ふ、この時の余は決して汚なき肉と骨とのみにはあらぬかと、パイサゴラスが人の幼時を回想して樂しと思へるは彼れが靈の神の傍に侍りて無限の快樂を享けしときを距ると遠からで、移香の消えやらぬが爲めなりといひしもこの事にやあらん、純潔なるこの境涯は陰險邪惡の世に立つに及びて忽ち余の傍を去りて記臆の空なる名の裏に裹まれぬ、

されど止みなん、今は及ばし、我は近き頃の記臆を辿れん、去歳の十月、余は西遊の途に上れり、そは醫の言に從ふて宿痾を養ひ、又嘗つて見ざる勝地を探らんが爲めなりしかども、亦實に余の友土屋大夢に會せんが爲めにてもありき、淹留浹旬快云ふべからず、鴨河の水、摩耶の山、今猶眼に在り、たまく大夢東行の擧あり、余も亦行李をおさめて倶にす、十一月のはじめつかた、神戸丸に搭して東阪の途に就く、余の端艇より將さに甲板に上らんとするや、前面に立てる者あり、圖らざりき、是れ松本艶骨ならんとは、云ふ、われ父の訃に接して業をすてゝ來ぬと、余は先づその不幸を弔ふて室を同ふせり、余の二氏を知る玆に歳あり、嘗つて相契りしとき、互に性を異にせば一人は孤寡を歎つらんと云ひもて笑ひしとありき、

夫れ斷金の友半歳をへだてゝ相逢ふ語なくして止まんや、艶骨携ふ所の酒瓶と芭蕉の實とを把りて且つ飲み且つ啖ひ、快談時を移す、渺々たる海の面、白鷗の飛び交ふ樣、朝暾の摩耶山に映ろふ樣、常ならば余も畫圖の裏たるべきに今は山秀水奐の微をいふに暇あらず、盖し大夢と艶骨と共に名家の後を享け、氣壯に才鋭し、彼は身を海外貿易に委れ、去歳米洲に赴き、是は志を水產拾利に傾け、二回南島に在り、拓殖興產の道自ら瞭然たる者あり、彫蟲推敲眞に餘技のみ、さるに吹唾猶ほ金石の音を爲すものあり、大夢又佛理、哲學を知るなり、

話柄屢變し、快愈增しぬ、余が淨るりの妙をいふや、二氏亦嘖々としてその傳ふべきを云ふ、余乃ち一文を草して世に問はんことを約す、如何にせん宿痾歳を踰へて癒へず、遷延復數月、やうやく四月に至りて淨瑠璃論上中下三篇を草して先づ小崎弘道氏に贈り、端なく六合雜誌に見るを得たり、

是れ素より浮萍斷梗、所思の半を云はず、されど世に同好の士ありけん、田中古象氏は直ちに一文を女學雜誌に掲げて余を賞揚し、且つ淨瑠璃學校の設立を望めり、余は次いで樂の變遷及び用意を日本評論に掲けて聊か古象氏に應へ、竹の舍主人、如電先生に望むところありき、次いて淨瑠璃節及び其著作を女學雜誌に掲げ、竹の舍主人にのぞみ、菁莪居士に問へり、余は竊かに思らく此樂を盡せりと、而して是れに答ふる者なかりき、

淨瑠璃節傳ふるに足らざるか、余と余の云ふところは誤れるか、何ぞ然らん、乞ふ輓近文壇に表はれたる者を見ん、樂としての淨瑠璃を賞揚したるは余の前に既にありしや否やを知らざれども、詩としての淨瑠璃をたちへ、平安堂、千前軒、半二、宗輔等の後を繼がんとしたるもの少なからず、中島篤氏は逆卷涙を著はし、大槻如電氏は憲法淨瑠璃を作り、秋城居士とか云へる人は都の花に可笑しき政黨淨瑠璃を掲げたりき、逆卷涙は菁莪居士の知に遇ふて賓客の席に奏せられ、憲法淨瑠璃は作家自ら節附けさせて技に上せしめぬと聞く、余はいづれも聽くを

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

得ざりしかば都合よく行きしや否や知らず、若疑ふところありとせばそは今の作家に殆んど免かれがたき比較の案如なるべし、余は又酔月奇聞といへるを坊間の樂師の歎ひしをきゝぬ、材を擇ぶを正しからず、樂の趣味索如として求むべきなし、その他作者は浄瑠璃となさんとするの野心ありて作りきと云へる阿新丸、及び端歌小唄の類は演藝矯風會の雜誌及び他の雜誌に出でぬ、

評家の眼光を作家の着想と文藻とに向けたるは依田學海氏と小永井小舟氏の新評戯曲を始めとす、支那講文の法にならふて微を闡き、妙を探り、聊か浄瑠璃評の爲めに氣焔を吐きたるものなきにあらず、後に國華叢編、日本華文の歎ありてこれを襲げり、

瀧川龜太郎氏の近松門左衛門の事蹟は國民の友に出でたれども、是れ批評的に平安堂の著作を觀察したるにあらず、唯彼の文藻に於ける逸品を集拾したるのみにて南水漫遊、竹豐故事、聲曲類纂などを渉獵せば得る所未だ没には盡きじと思はるなり、

浄瑠璃作者月旦は「我邦文學發達に裨功ある浄瑠璃作者其伎倆の跡は今に傳はりながら其傳記の大率埋沒して其風采閲歴のあらまし將た其蘊蓄の一斑をも知るの便を絶えたるは惜みても餘りあり」とて著はしゝなれば今少し精詳なるべきを、評者なる三昧道人は平安堂と風來正人とは世の人已に知りぬとて省き、海音、宗輔をやゝ説きて出雲を疑ひ、半二の爲めに力めたり、

道人云ふ「予は浄瑠璃作者中より近松半二と云へる人物を一人撰び出して名家の稱を贈與したり」と、

又云ふ「其作文章に癖はありながら百練の筆なり取り分け意匠の拔群なるは前後に殆んど其類を見ず其筆の跡によりて其志を察するに常流の歩む道をわれは歩まじと思へるに似たり」と、

又云ふ「浄瑠璃作者を云ふ者大抵近松竹田に功を歸して半二に指折る人少なし予を以て見ればこは所謂流俗の見にして吾古來の云慣はしに從ふのみ活眼の見といひがたし」と、

又云ふ「結構の偉大筆力の精勵是れ半二の特色なり清楚儁逸梅花の絶俗なるが如き致に至つては悲いかな半二一點もこれなし」と、

蓋し梅花は梅花の致あり、櫻花は櫻花の致あり、山吹菫花の微も特色の妙はあるものを、若品を分ち類を立なば容易にさありと同ずるを能はずと雖も、半二の爲めに力めて一籌彼のために成りたるが如きは、頁し題目には適當せざるも、自ら俗を脱したるの冒、造詣する所なくんば斯る評を爲すを能はず、余は已に女學雜誌に之を質議せり、

題目の本領外に道人は云ひぬ「大構造の小說を作る作者は遙か其後に起りたるが此蹤は更に浄瑠璃の様式を學び夫を根底にして銘々一工夫を加へたるものなりされば曲亭馬琴の如き他の當時の小說家が遠く及ばざる學殖を有し其流儀に於ては一代の宗師と許されたる大家なるも細かに其著書を吟味すれば其脚色の組構其布置の取方刻々浄瑠璃を學びたるのみか其文章の趣すら其實浄瑠璃の骨髓を取りて僅かに其皮肉の色合を變じたるに過ぎず云々、馬琴すら然り柳亭種彦以下紛々たる合卷、讀本の作者皆浄瑠璃作者の傳灯弟子たらざるはあらじ況してや浄瑠璃の演劇に與へたる材料には亦偉大にして今更擧ぐるに及ばざると世人の遍く知るところなり」と、實に是れ浄瑠璃の爲めに萬丈の光焔を吐きたる者、詩としての浄瑠璃を見たるものゝ内にてこれより多く看破したるものあらじ、

竹の舍主人の我國の文學に精しきは余も人も容す所なるが、今方に浄瑠璃の系統を究めつゝありと聞く、宜なり、主人の近松門左衛門と竹田出雲は一篇の短文字なるも極めて精詳緻密にして歴史的研究の結果紙上に躍如たるも、篇中價ある處は近松作の百合若大臣野守鏡と出雲作の蘆屋道滿大内鑑とを對比し、出雲が門左衛門の作を摸倣剽竊したるの迹を明かにし、三たび鍵を擧たるにあり、

主人は又院本著作の變遷を尋ねて元祿より享保までの三十年間を以て門左衛門の時代となし、享保より寶暦までの三十年間を以て出雲の時代となし、寶暦より天明までの三十年間を以て半二の時代となし、更に進んで「第一期の門左衛門は其身の文章を世に知られんとの念熾んなれば自然に花に傾き第二期の出雲は其身竹本座の座主なれば己が文藻を世にもてはやされんよりは見物の氣を取らんと思ふが先きにて遂に趣向にのみ傾き半二は花實揃ひし跡に出て特に先蹤より劣りたる文才を以ては手を下すべき所なきより目新らしく仕組々々と凝りてあらぬ道に入

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りしにて共にかくなるべき自然の順序にてあらんか」と云ひぬ、半二を見ると三昧氏に異なりてやゝ貶したる語路なきにあらず、多少の異論を挟むものあらんか、されど人をして院本著作の傳統を知らしむるに足る、一字一句みな多年心を留めて捜索したるの餘ならぬはなく、浄瑠璃を記したる書の世に尠く、まゝあるも支離裂滅、反故に均しきを知る身には一入其勞も知られぬ、

主人は又今の大家等が只管「新奇の工夫にいそがしく此業に身を委ね玉はず」とて去歳より身を閑にして我國文學の源を究め、流域を清くせんとて、余輩に約しぬ「近松門左衛門の事蹟と著書に付き知己朋友贊助によりて編輯を終りたれば近日その書を發行して尚ほ廣く博識家の訂正補遺を請はんとす」と、馴れたる博物家が鋤を肩にして地下の世界をさぐるが如く閑らきに隠れたる寶を余輩に貽るを遠きにあらざるべし、殊に余は門左衛門に於て鄙懐を抱くものなるが故に其者の出來んことを望むこと切なり、

この後閑根吟風氏の近松半二の逸事ありしが恰も瀧川氏の門左衛門に於けるが如く一言の評だに付せざれば爰にいふに足らず、

余の浄瑠璃論を著はしゝまへに世の浄瑠璃に對する意見は實にかくの如くなりき、見るべし、詩としての浄瑠璃は大家の吻尖に上り、死屍綺羅を飾るの盛なきにあらざりしも、樂としての浄瑠璃は必ずしも説かず、好むものは好め、樂むものは樂めと云ひもて等閑に付するが如き狀ありしを、是れ故なきにはあらず、近きころ文學の嗜好一變して所謂元祿文學なるもの起り、吹箏の巧を希ふもの、あるは西鶴となり、あるは其磧となりて互大の名譽を僥倖せんとせしより、浄瑠璃本も亦この逆浪中の一渦となりて彼輩の一願を忝ふし、丸本は日を追ふて刊行せらるゝに至りしなり、却つて樂としての浄瑠璃は春蘂一流の頑固説を持して猥鎖、泥鈍、淺薄、卑陋となしてこれを發くる者なきは怪しむべきにあらずや、一の演藝會新樂に盛せりといふ、余は信ぜず。

理學

吉田伸子

○空氣の不導熱性

若し空氣が熱の爲め容易く運動を起さない物ならば、空氣は此上もない熱の不導體であるのですが、惜いことには、熱を受ければ膨脹し、輕くなれば上に昇り、其跡には新しき空氣が來ます。然るに、此新來の空氣も、暫時にして温になれば、又昇り去る。此新陳代謝の運動のため、空氣は熱を導き去る姿になります。併し此運動をなるだけ妨げる樣にしたもの、例へば綿、毛織物などは、其組織の間に含まれて居る多量の空氣が、熱を受ても自由に運動することが出來ぬものですから、只の空氣よりは、熱を導くことが少ないのです。

○濕りたる空氣

空氣が熱を導く力は、濕氣の爲めに著しく增すものです。若し通常の乾燥空氣の導熱力を八十と致しますれば、濕りたる空氣は、二百三十の力を持つ割合にて、乾燥空氣より殆ど三倍ほど早く熱を導く樣にあります。此理からして、空氣の濕りたる時は、冷氣を感ずるのでござります。

○感覺は溫度を知るの便とならず

一寸物にさわつて見て、其物が溫いとか冷たいとかの感覺で其溫度が高いとか低いとかを極めることは無理です。なぜなれば、導熱力は、物によりて非常の相違がござりますから。今素足で絨氈(不導體)の上を歩めば、溫かに覺えますが、大理石(良導體)の上を歩みますれば冷たく感ずるでせう、—勿論此二つの物は、精密に同溫度でも。之れは大理石は絨氈よりも速に熱を導き去るゆへに冷たく覺ゆるのです。

水は空氣よりも良く熱を導き、金屬は又水よりもよく導きます、それゆへに華氏百二十度位に熱したる金屬にさわりますと、直ちに火傷する位であるし、又水の中に手を入れてソシテ其手を動かさぬならば、其水の溫度を百五十度まで高めることは出來ませぬ、即ち百五十度の湯の中にはヂッと手を差し入れて居ることは六ケしいことですが、併し空氣ならば二百五十度乃至三百度の高溫度でも堪えることが出來ます。或人は二百六十度の熱室中に、格別の不便を感ぜずして、數時間止て居たと申します。此等の事を見ても、感覺では溫度の知れないことが分明でせう。

小說

浮雲胸

雲峯子

第八回　僞樂天

昨夜より雪ふる可き空合ひなりしが半夜忽然狂風起り、滿天の黑雲烟の如く消え、曉に至り、月影次第に西山に沈み、星光漸く新陽に犯され、風止たらんには早や少しく長閑なる可き時とはなりぬ、然るに風は朝まだきより一層勢力を加へ、折々空を過ぐる村雲、走るが如く、亦舞ふに似たり、東京市中黃塵漠々として雲霧の起り消ゆるが如し、加ふるに寒氣未だ甚だしければ人々戶外に出る事稀なり、平常はさすがに人の往來織るが如き、銀座の大道すら寂寥たるに至る、況んや窮巷隘路に於てをや。

神田の內なる可し、萬世橋より程遠からぬ所に橫巷あり、其入口に人の集ふ事甚だし、斯る寒風烈しき日に人の集ふは何故にや、見れば頻りに、橫巷に入る人あり、愈怪しければ近づき見るに入口に「女子政談演說會」と筆太に書きたる紙を粘附す、其傍らに「辨士春山女史外三名」と記す、人々其揭示を

見て大ひに評する所あり、あるは未だ男子だに演說を爲し得る人は少なきに女史にしては驚く可きことにこそ」と云ひつつ演說場に入るあり、亦は「片腹痛き次第あり」と冷笑して過ぐるあり、集る人半ばは演說場に入る。

橫巷を入る事二三町にして右側に一樓あり、萬年樓と云ふ、その門口に「演題及び辨士」とあり、第一に「女子と國家」、辨士池田うき子」と揭ぐ、次に「文明と女性、染野いと子」とあり、第三は「日本の女子、山内きく子」なり、最後は芳名一世に高き春山女子にして演題は「女子の本分」となす、早や午後一時に近し、二時開會とあれば早や間もなしとて、人々推し合ふが如くに入る、一時半を過ぐる頃、樓上立錐の餘地あきに至れり、司會者は彼の小說家として浮田なみ子に弟子入りしたる人なる可し、顏の赤くして肥えたる所、其音聲の奇なる事等にて知らる。

滿場の聽衆如何なる心にて集りけるにや、笑ひさはぐ人、罵り呼ぶ者、囂々亦擾々、沸くが如く叢ゆるが如し「早や二時の鐘鳴りぬ」と云ひつゝ拍手して辨士の登壇を促がす、一人拍手すれば數百人忽ち之に從ふて拍手す、其音恰も雷の如し、數回の催促にて司會者徐ろに登壇し、聽衆を靜めんとす、此處に集へる人多くは青年書生輩なれば容易に靜まる可くもあらず、司會者は云ひ出しては止む事數度にて遂に開會の主意も人をして解せしむるに至らずして壇を下りぬ、其云ひし所何事なるや、解せずと叫ぶもの多かりしが再び登る事もならず、司會者は廣告の順序に順ひ、第一の辨士を聽衆に紹介し、演題をも述べて椅子に就く、辨士は赤面し、且其心も臆せしか、頓には云ひ出ださず、漸く云ひ出すかと思へば言語不明了にして聞き取れず、演說半ば頃と思しき頃、人々さはぎたち、司會者は靜まるべき由告ぐれども益々騷ぎ立つ、斯る内にて半ばを演說せし故無論何人にも聞き取り難かりし、其次の二名も亦斯の如くして終りぬ。

さすがは明治文壇の女傑なりと賞讃する人もありとか、なみ子は此日二種の批評を蒙りぬ、一は其大膽厚顏なるを識る者なり、一は之を賞むるの徒なり、蓋しなみ子は登壇して少しも恐るゝ色なく、泰然として滿場を睥睨し、徐ろに說き出し徐ろに辨じ終たればなり、偶ま聽衆中聲を發して「ヒヤ〳〵」若くは「ノー〳〵」と云ひ、亦批評言を吐いて妨ぐるものあれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ば其聲止むまでは口を開かず、平氣にて立て四方を見まはすのみ、聽衆は詮方なく聲を止れば即ちなみ子は亦說き出す、斯くして終りまで、明白に演述せり。

翌日太平新聞に「女子演說」と見出を附し、其側らに「左の一篇は春山女史が昨日萬年樓にて演說せられし者の大意なり、今其草稿を女史に乞ふて要點を左に摘記せん」とあり、演說中の一節に曰く、

世人が……殊に我國の人が古來女子を賤しめたる所以のものは抑何故ぞ、其原因一にして足らざる可しと云へども、最も著しき原因の一つを擧ぐれば即ち世人が女子の位置を知らざるにあり、若し之を知りたらんには必らず、適當の尊敬を爲し、適當の位置を與ふべき筈なり、只夫れ位置を知らざるが故に今日の如き弊害を來すに至れり、豈慨嘆に堪ゆ可けんや。

然れども今此處に於て徒らに慨嘆するも功なし、故に女子の位置が如何なるものなるかを說かん、夫此世の人類に男女の別ある所以は、必らず男女相共に相助けて世を渡る可きものなり、されば女は男を無用なりと云ひて賤しむ可からず、男子も亦女子を賤しとなして輕んずる可からず、要するに兩者相待つて此處に完全の社會を組織すべきなり、世人が此睹易き理を知ずして女子に政權を與ふ可からず、男尊女卑の風靡す可からず抔云ふは謬誤も亦甚しき哉、熟々古來の歷史を繙くに女子を壓制せし國にして榮えたるものなし、之を見れば苟も我國の將來を憂ふるものは須く奮起して女子の位置を高くする事を勉めざる可からず。

如何なる論理に依りて斷定せしか、少しも分らぬ所多し、是にても何世には感服する人もありとぞ、各新聞に記載する所の演說の批評大抵は好評なり、されば女子演說家として浮田なみ子は天晴れの名聲を世に知らるゝに至りぬ、之よりは叔母なる人の家に止る事もいと少なくなり、多くは車を走らし日々貴女令孃社會、新聞記者等に交際する事絕えず、始めの程は叔母も默許せしが、餘り他出する事の多きより遂には戒むる事も屢々となりぬ、されどなみ子は更らに聞き入る可くもあらず、先きに共に演說を爲せし人々及び他にも尙會員を募り、女子演說會と云へるものを建設し、會則をも作り每月一回演說會を開く事となしぬ。

久しく文通もなかりしとてなみ子の父よりいと長々しき手紙來りぬ、なみ子は開き見るに其始めは通常一定の文句にて可もなく不可もなし、中頃より亦例の婚姻の事なり、

御身もはや年若きといふに非ず、今年は是非共婚姻する樣確く申聞け候、今後何時なりとも歸省すべき由報道せば直ちに歸省致す可く候、學問には到底限りも無之候得ば最早相止め候方宜しかる可く候

とあるを見てなみ子は非常に憤激し「結婚は我自由なり、敢て父母を煩はさず、今日に於て何斯る事を云ふとは如何なる御心なるやと」云ひつゝ直ちに返事を認む、とは婚姻の事は如何に父母の嚴命なりとて應じ難し、との意を述べたるものなり、父母は之を見て大ひに怒りしが、詮方なしとて、なみ子の叔母に亦書簡を送り、適當なる所あらば結婚なさしむる樣告げ置きぬ、されば叔母はなみ子の歸宅する毎に適當ならんと思ふ所を問へども何時もなみ子は應ずる事なし、叔母はいと困じはて「御身の父母より依賴を受けて御身に關する事は我が知ざる所なき樣にあらまほし、されば何事も隱す勿れ、殊に婚姻の事に至つては生涯の一大事なり、必らず人に相談して而して後に定む可し、御身の爲めに惡くは計らず、必らず明に云ふべし」と告げ置きぬ、なみ子は一度は聞きてうなづきしが、其言忽ち一方の耳より脱し去りぬ。

春も何時しか過ぎ夏は避暑とて箱根に遊び、大磯に行き杯してなみ子は暮しぬ、折々小説を著はして新聞雜誌に投ずる外是とて爲すべきの用事もなし、果ては閑散なるに苦しみて、東京に歸りぬ。

秋の始めつ方よりなみ子は何となく沈みて見えしが叔母は其故を知らず、時々其前に至り、何か云はんとせしが云ひ兼て口を箝む樣子なり、叔母は或日其故を問ふ、なみ子は容易に答へざりしが何れ一度は云ふ可き事なりとて勇氣を振つて云ひ出しぬ、其は即ち婚姻の事なり「某官省に奉仕する人と友人いと子の家にて遇ひ、其後兩人相見る事もなかりしが、愛情遂に制する能はず、或官吏なる人書を寄せて求婚のよし申來りぬ、なみ子は之を心にかけて沈みしなり、今叔母に其官吏なる人の性質、人物、位置等を精しく語りぬ、叔母は直ちに國元に其由を報ず、なみ子の父上京して遂に談判調ひ、翌年二月婚姻の約を爲しぬ、即ちしづ子が婚姻の明年なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家　政

○國政と家政

井上次郎

一國に政治ある如く、一家にも亦た政治あり。一家の政治を論述講究するを家政學と云ふ。家政學に好き書物の無きや久し。一國の政治學に名論を得たるとの極めて近ごろなるに均し。若し大小を以て輕重を謂はば、學校にて教ゆる科業は總べて天下實際の事物よりも少さきと万々、さては教ゆる所ろ悉とく大切にあらずと云ふとを得べき乎。故に、一家の政治は一國の政治よりも小なりと云へど、之を以て重からずと爲す可らず、たとへば天下の政治は一國の政治よりも大ひなれど、之を以て特更らに重しとせざるに同じ。

○家政讀本

家政學の爲めに好き書物を著作するは、國政の爲めに名論を吐くと、功績相似たり。アリストートル、プルンチウリー、スタイン、など出でゝ、國政の理術やく明白となりぬ、何んぞ女學社會に同樣の秀才出でざる。一國に、政治と法律と經濟と農工商とあるが如く、一家にも亦た之れあり。家風は即はち家の政治の根本にして、日々行事の定めは家の法律なり。金錢出入の收納何んぞ國の經濟に異ならん、米を買ひ器を修繕し物を賣買するなど、みな一家內の農工商にあらぬはなし。されば、國政に對すると同樣なる盡力をもて、一家內のあらゆる政治を調理し、其取扱かひ方の覺悟を考究して、一の家政學あるものを組織し、之が爲めに好き著作を爲すは、莫大の功績なるべし。

○家政書の釋譯

從來家政學の爲めに種々の著作ありつれど、大率ね皆な翻譯にして、實際に適用すべきはいと〲少なりけり。例へば竈の事を言はずして、ストーブの事を仰山に論じ、松杉の事を說かずして、山毛欅、にわとこ、の事を一圖に說明するが如し。其過まち原文のまゝに翻譯したるがゆえなり。大ひなる國の政治すら、彼國のを移して直ちに我國に用ゆると難し、況んや、實際直接の事を旨とする一家內の家政に於てをや。煉瓦の家、肉食の料理、富める經濟の外國風を、其まゝ我國に移さんとするは、固より出來がたきとなり。然るに此文章を其まゝに翻譯して、我國人に讀ますべき家政書を爲さんに、

益する所ろ果して幾干ぞ。

○家政學者

願はくは、家政學を専門として只管らに之を講究し、彼の國の理論を應用して之を我國の實際に適するやう調理し、現今の度合相應の家政を組織して、一の日本家政讀本とも云ふべき者を編述する人わらんことを。若し然らば今の社會に取り功益莫大ならん。世上その人多かるべし、何んぞ速やかに志を決し、早く此の大需要に應ずることをせざる。

「ホーム」議案

（三）ハンチントン、ミッラー女史の意見

奴婢とは一種の雇人にして他の職工と自ら異るが如く、我人共に思ふ。通常の雇人即ち職工などは皆法律の下にありて勞働し賃錢皆制規あり、獨り奴婢に至つて定れる務めあるなし。他の勞働者は巧拙の度によつて賃錢に差あり、巧みなるは用ひられ、拙なきは退けらる、而して人之を見て正しからずとなさず、然るに家庭に於ては事務を治むるの巧拙によつて賃錢の高下を生ぜず、我等は家政を以て一の技術とせざるが故に如何に治むべきやを知らず、語を變へて云はば奴婢の爲すべき事は未だ確定せる模範なしと云ふにあり、是即ち奴婢を用ゆる事の難き所以なり、左れば今日に於て奴婢の勞力に應じて賃錢を定むるは家庭改良の急務なり、勿論少數の女子が之を企つるも全國に行ふは難ければ、多くの主婦たるもの同盟して法規を定むるを要す。

是奴婢を熟練せしむるの好方便なれども、主婦たる者先づ熟練の功なくんば家政は遂に治む可らず、故に人の妻たり、娘たるもの家政を學ぶに不注意なる勿れ、要するに一家を整理すべき女子は先づ其奴婢に爲さしむる仕事の種類、其勞力の眞價を知らざる可らず、左に記する項目は思ふに家庭を治むるに於て注意すべき要點なる可し。

庖厨には必らずしも新發明の器具を要せず、通常の器具を調へ置き、之れを活用すべし。主婦たるもの奴婢に對して事務を整理する順序方法等を懇切に教ゆれば、始めに無能無藝なる奴婢も必らず主婦の意に合ふ働きを爲すに至らん。食事の時間を定め、家内の事務は家族共に分擔し、奴婢の務めを輕からしむる樣注意すべし、亦力に餘るの務を命ずる事なかれ、一度に多事を敎ゆ可からず、一終つて他に移れ、過失を咎めんより寧ろ忠實あるを稱讃るを度々とせよ、心切懇篤に奴婢の爲めを慮れ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

批評

○眞善美日本人

三宅雄二郎君の著なり。曩に俠骨隊列して國粹論を喝破したる面々も、今は何となく旗色さめ氣に見ゆる折柄、三宅君獨り雄志勃々たりと云ふべし。自國の爲に力を盡すは世界の爲に力を盡すなり、護國と博愛と奚ぞ撞着すると有ん、世の所云る國家主義なる者にして、果して國家全體の勢力を擴暢せんと欲するものあらんには、余固より之を取らんと云ふ辨論極めて味わひあり。眞善美の三つを分說するに當り、日本は社會上の眞理を研究するに便利なりと云ふ所ろ、說き得て甚はだ吾黨の所見に同じ。極端の國粹保存論は素より賛成せざる所なれど、我を中心として万事を採擇するの覺悟は、何者にも必要なれ。此意義に於ては、國粹論が深く時弊に當ると決して言爭ふ可らず。吾人は三宅君此著の如き保守論に同意す。

○自由平等經綸

中江篤介君の主筆に成る。近頃ろ餘り多く兆民居士の文を讀みて、少しく珍らしからぬ心地すれど、第一號發刊の旨趣の如きは、實に近來の秀文字と云ふべき哉。居士は到底散文界の情詩人なり。

○參考標註徒然草拔萃

鈴木弘恭氏の著にして、徒然草中の佳き所ろを拔萃せり。

○風流魔

兼て聞及びたる露伴子が風流魔、しがらみ草紙第十七號に出でたり。實に驚ろくべき著作なり。此は露伴子が數年前の著作と聞しともありしが、果して然らば其技倆實に非凡と云つべし。說く所ろは色道を女に傳授するにあり。二十七條の秘傳一々人の臓腑を穿ち、浮薄男女の弱點を曝露せずと云ふとなし。而も、著者が理想は常に文章外に秀然として聳え、讀むもの丶心に斷えず更に大ひなる教を與ふ。其が所云る秘傳を教ゆるものは即ち女魔の誘惑を避くるの覺悟を教ゆるとを知る。吾人は露伴子が此流の文字を作るを以て、風俗を亂すと思はず。左れど、未だ至らざる文士にして若し之に倣はば作弊少小にあらず、又幼稚の子女にして之を讀まば、害を感ずると利を受るよりも多かるべしと信ず。要するに驚ろくべき著作なり。美妙齋の一評は少しく酷に失す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

美人箴

美人薄命

ふみ子

昔より美人薄命なりといふ（美人の定義は姑く措き玆には世の所謂美人を指す）なれど、われ思ふに、薄命美人に伴ふにあらず、美人好んで薄命に陷るもの多からんと。彼小野の小町が事は、實際有りしや否やを知らず、去れど老後落魄して、卒都婆に倚りかゝり、乞食となりたる話柄をして實事たらしめば、彼が若き間其美を恃み、老后の事を計らず、遂に薄命に陷りたりしことを知るべし。楊貴妃は如何、彼は玄宗の寵を頼み、一旦人世の榮華を極めたりしも、馬嵬に縊殺せらるゝの不幸は、彼が自ら招きし所にあらずや。其他王昭君の如きも、胡に遣らるゝの不幸に遭ひしは其美三千の後宮に冠たるべきを自ら許し、畫工に賄賂せざりしに依る。斯の如き有名の美人にして、亦有名の不幸に陷りたるもの、多くは自ら薄命の境遇を造りたるものなるを思へば、其他の小美人にして、小薄命に陷りたるものは、蓋し枚擧に遑なからむ。

今の世の娘子社會を通觀するに、矢張此歎を招くの傭を造り居るものゝ如し、容姿美しき娘子は、自らも其美を恃みて敢て女藝女職を勵まず、父母も亦彼が容姿絶倫なるに、眼眩み、倩たる巧笑、盻はる眉目以て瑤輿に駕するに足ると、之れに勉學を強ひず、遂に其美貌あるが爲に、無智無識若しくは、我儘氣隨意の難物となり了らしむ、女學生社會を見るに又然り、勝れて容貌の美しき人は、多く目立ちて、學文の出來ぬ方の人物なり、間々双つながら兼ぬるものあれば、我儘氣隨意といふ惡癖あるは、多く免かれ難きやうなり、此等の人此儘にて過ぎ行かば、遂に薄命に陷らざる事やあるべき、左るを他日薄命に陷りたる曉、美人薄命なりといふて歎ぜば、如何誰か其薄命は、薄命の彼に伴ひたるにあらずして、彼自らが好んで薄命に陷りたるものなるを憫まざるものあらんや。嗚呼美人よ、御身が形躰の美は、却て御身が心を醜にする者なることを記臆せよ、御身が朝夕鏡に對して凝すの粧ひは、却て是御身の心を鈍らす魔睡劑なることを記臆せよ、又御身を美なりと稱し麗なりと賞る聲の聞る時は、自ら顧みて、其靈も其行も

亦、人の賞讚を受くべき價値ありや否やを心に問へ。斯くして進み行かば、醜婦必しも多幸ならざるが如く、美人なるも薄命に陷らず、薄命ならざるも、美人の稱を完ふするを得て、美人薄命てふ不祥の語を全く驅逐し去ることを得む。女學雜誌の讀者美人多きや否やを知らず、されどわれは美人の爲に悼み、美人の爲に憂ふ、而して又双美の人を欲するの意切なるを以て、敢て美人の爲に一言を呈す、願くはわが此言を以て醜婦の囈語となす勿れ。

時事

○醜聞時代

吾人夙とに警告すらく、政治問題の閑となる時節は、醜聞製造の時節なりと。近頃、漸やく其氣運を催ほし來る。各女學校の幹理者並びに父兄諸君、篤く戒鑑あるべき也。

○文部省と下宿屋

文部省は各女學校に令し、下宿屋より通學する生徒を謝絶せしめんとすと云ふ。かゝる事柄迄文部省が干渉すべきものにあらず。然れども、各女學校に於ては、無論其邊の用心はあるべき筈なり。

○政府當然の義務

政府當然の義務は、新聞帋上の亂報を取締ることにあり、就中風俗を壞すに至る醜文字は一層嚴密に制裁せずんばある可らず。近ごろ堂々たる大新聞帋上に、廓名物、遊里案内、花廓の賛詩などを續々掲ぐるものあり。斯して帋の一隅に於て世の醜風を叱責すと云ふと雖ども、誰ありて之を信ぜんや。右の手に人を毒し、左の手に毒するとはあしゝと書かんに、公益する所ろ何ものぞ。

○二十四年度の豫算

いよ〳〵確定し、去十一日に發布したる法令中、女學に關する官立校の豫算は左の如し、

女子高等師範學校	
政府支出	二万七千二百二十二圓
諸收入	九千六百二十三圓
東京美術學校	
政府支出	一万七千八百〇〇〇圓〇
諸收入	一万四千〇廿六圓十九錢

	東京音樂學校	東京盲唖學校	富岡製糸場	千住製絨所
政府支出	一万一千六百二十二圓	二万圓		
諸收入	二千三百七十八圓	二万九千〇五十圓		
作業收入			廿一万九千七百廿二圓五十錢	七十六万一千八百五十九圓六十二錢
雜收入			百十二圓八十錢	五十圓

誤解か強辯か

高等中學校事件の終末

實に紛々たる譯の分らぬ世の中かな、若し眞とに國を愛すと云ひ、眞實に帝室を敬奉すと云はゞ、吾人は人后に立つものにあらず、但だ夫れ今の囂々たる唯口唯舌の論士の如く、陽に愛國々々と稱して殆んど野蠻人に似たる言行を爲し、内心自利貪慾に厭くなきの樣あるを見ては、憤慨一日にあらず、況んや權を帝室と云へる稱號に假りて、やゝともすれば妄りに之を利用し、而も内實は大不忠の言行を露はすものあり。

吾人は如此き形狀を目撃して痛歎止むことを得ず、則はち世上に告白して彼の僞善虚飾の徒を嚴責するのみ。近ごろ、國躰保維會とか云へるものも起り、又天台道士なる人の文章も出でたり。中に邪教もしくは破國躰など云へる文字を插さむは、抑そも何ものを指ざして言ふの語句か。吾人が、第一高等中學校の校長及教頭に面談し、木村駿吉氏非職の理由を質したるときは實に左の如き答辯を得たり、

勅文を尊崇せんとするより發する誤解の爲に、少數人が不義不當の處罰を蒙むるに至るとも校長は此處置を可とし、其誤解を滅せんとせず。而して此不義不當なる處置は、勅文の精神に違ふことを。校長自ら承知す、然れども勅諭を尊崇せしむるの方法は、先づ外形上の式を第一とするが故に、暫らく此精神に反くとも自から安心す。（押川方義 巖本善治 二人即席速記の文）。

夫れ、既に不義不當と承知したる處置を施こすの教育者、並びに勅文の精神に背くともたゞ外形上、ハーッと有がたく頭を下げ、之を本尊とし、之を信心することを旨とする臣民は、彼の良心を重んずるものよりも帝室に忠なる乎。況んや、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

勅文禮拜は、生徒統御のポリシーなり、政略なり。若し其面目に禮拜しがたしとならば、便所にでも行て避けたまへは宜しかりしに、余り正直なりし。

斯く明言するの意思を以て勅文を禮拜し、而して實際には、頭の下げやうが少し足らざりしと云ひて、大不忠大不敬なりと囂々するに至つては、僞善幾千許ぞ。抑そも、眞正の愛國者、眞正忠良の人民は、如此き虚飾を太甚しく嫌惡し、斷じて其命に從がわざるもの也。同胞須からく思ふべし、唯々として形に順從するは、赤子も尚能くす、昻然信ずる所ろを守りて敢て拒反するは、凡俗柔士の決して爲しがたきもの也。龍の玉をさぐるものは、當に此邊に着眼すべし。

○支那の青年

阿片貿易を防がんとて、支那北京の基督教徒青年會は、近頃左の如き公書を、英國の諸教會に送りたり、

中國北京幼年基督會會友書上

大英國幼年基督會衆會長雅璺敬啟者在本年二月間有英美二位教師特爲鴉片之事來至北京講論鴉片之害甚大遍處流毒害人無窮因此本爲敝衆會友平昔所見聞此言更加感嘆傷心故會友屢次聚會所禱大家共議此事知鴉片之害與傳教一事大有阻礙貴國之善士來中國專教本欲救困苦之頑民拯億萬之生靈所以捐貲萬貫不惜其財奈中國有鴉片之害傷人甚廣與聖道大有相關中國人意謂鴉片煙本自西國傳來現今如此害人遂疑聖道亦由西國傳來必傷害人之意亦必如鴉片煙之害流毒無窮也弟等雖知

上主之能實能拯救萬方使民人脫離地獄之永苦無奈無力禁止使不受鴉片誤人之害故衆會友派弟等三人敬書一紙以請

貴國會長同心祈禱尋方禁止務使鴉片之害趁今歲英中換約之期以絕其源幸甚幸甚

特此敬請

文安不一

陳恒德
張百林　仝拜
楊以莊

○女牧師

婦人にして教會を牧するの可否は、米國に於ける大問題なり。然るに、イロコイ州のドレーク夫人は、此度び組合教會内に於て最初の女牧師となりぬ。

○米國農會の決議

二月初め、米國子ブラスカのヲマハに開きたる、全國農業大會に於ては、愚民惡人等の男子より政治上の投票權を奪ひ、之を婦女子に與ふべきとを議決し、亦た、エバ、マックドーナル女史を舉て、同會の講師補と爲しぬ。

○和蘭國亦廢娼論昌熾

クレルク夫人之を統率し、和蘭の廢娼論者近頃いよ〳〵、熾んに運動す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

可愛子

問。簿記學を獨習するには、何校がよろしう御座いますか。（はつ）

答。數多くあるやうですが、麴町中六番町の簿記學專修學校から出る簿記之友といふ講義錄などは、其中でも宜しいやうに思ひます。

問。當時文章を習ふによい雜誌は、何でありますか（長崎縣北高來郡諫早女學校內笘屋乙女、山梨縣北都留郡きし女）

答。神田駿河臺文章專修會から出る文則といふ雜誌がよろしう御座います。

問。女禮式の何かよき本は御座りませぬか。（上毛の一賤女）

答。弊社から出版しました、西洋女禮といふ本があります。

問。「雪の日やあれも人の子樽ひろひ」と云ふ句がありますが、誰が作つた句ですか、敎へて下さい。（本所みれ子）

答。これは、享保年間、御老中を勤められし安藤對馬守が、ある日出仕の折、紛々として降り散る雪の中を、酒屋の丁稚が、寒さに弊を霳はして「御用は御座りませぬか」と聞てあるくを　駕の中から見て、そゞろに憐れを感じて、よまれた句だといふとです。

問。日本の宗旨の始めは、何時頃ですか。（西京、KM、生）

答。今より千二百四十九年前、即ち推古天皇の三十三年に、高麗國の惠灌僧正が來朝して、三論宗を弘めたのが始めです。

問。女學雜誌に出た社會改良といふ小說は、撰けて出しませぬか。（新島縣中蒲原郡井上らく子）

答。雜誌にはモウ出ませぬ、著者が此頃アノ小說は出版しやうかなどゝ話して居りました。

問。女學雜誌二百二十七號から、引續き御揭載の小說「小公子」は、讀んで深く感動致しましたが、譯者若松しづ子の君の、病氣の爲めとて、中絕致されたまゝお出しにならぬは、マダ御全快にならぬ故ですか。（井上らく子）

答。ソウで御座ります。若松姉は、今に病氣療養中です。

通信

可愛子編

〇靜岡縣通信

坂井蘭報

●今月末には靜岡尋常師範學校女子部にて十八名の卒業生あるべし。

●龍さと子吉澤さら子は女子高等師範學校に入學許可せられたり。

〇三重縣通信

愛與生報

●今度縣知事の推薦により高等女子師範學校へ入學許可せられたる田宮菊枝宮川しな、二孃は三重私立女學校の出身なり此女學校內に於て基督敎徒たる者唯此二氏のみなり二氏の入學許可せられたるは此私立女學校の榮なりと云ふべし。

●今度發正高等小學校にては高等科卒業女生十七名あり。

〇宮城縣通信

新波生報

●仙台一致敎會の姉妹等去る十六七年頃幾拍會を組織し每月二回敎會に集り裁縫編物等をなし其收益金を貯蓄し來りたりしが已に本年に至りては百有餘圓に積りたる由而て其目的は將來日本傳道の上に著しき事業を起すに在るとのとなり。（獨立傳道會社設立の見込なりと聞く）。

●婦人看病法研究會は當地師團の軍人の令閨令孃及其他の有志を以て組織し每日其講習あり會するもの每會百名に下らず。

●宮城靑年會に於ては此度運動の方法を定めて左の三部となし着々基督敎主義を社界に擴張せんとす、第一部（演說部）は宗敎と學術、矯風等の演說に從事す、第二部（矯風部）は廢妓及慈善的の事業をなす、第三部（傳道部）は監獄兵營、官立諸學校に宗敎の自由を實行せしむるの策を講す。

●當地には裁縫敎授所數多あり中に付て尤も有名なるものは柳架學校、松操學校、身章私塾等なり。

●宮城女學校は生徒現今四十名位なりと他に當地には高等の女子敎育をなす所なし同校は基督敎主義なるを以て何となく世間に嫌はるゝ爲め十分の信用を東北に有する能はざるも二名の西洋婦人二名の日本婦人三名の日本男子の熱心盡力せらるゝあれば何時か必ず其成功を社界に現はすに至るべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●當地の遊郭は近來非常の不景氣なる由之に反して密賣淫婦の盛なるには恐入るの外なし吾黨之より大に矯風の事業に盡力すべけれども亦大に當路者の注意を仰き度ものなり。

●仙台慈善會に於ては昨年中より貧民の救助に盡力し來りしが本年に至り倘其事業に從事し居れり近頃は毎日曜日教會に於て飯米を施與し居れり該貧民中には實に形容の出來ざる程憐れなるものあり且同會にては貧民の子女を教育せんとの計畫もあり已に尤も憐れなるもの丶子一人を引取り目下或信徒に托して教育し居らるゝ由。

〇福井縣通信　　秋山貞二報

●福井師範女校女子部は三月十一日限り廢止す同生徒は悉皆卒業の見込ありて既に縣下各小學校より雇聘の申込あり同部廢止の上は當縣にて普通高等の女學校は中學女子部のみなり。

〇岩手縣盛岡通信　　風殘子報

●小谷野敬三氏は去月廿六日縣手縣尋常中學校教諭(月俸八拾圓)に任ぜられ教頭として出校し居らる。

女報

可愛子編

●三浦子夫人　陸軍中將三浦梧樓氏の夫人は、去る十日、夫と共に藤澤地方へ赴かれたり。

●各國公使夫人參內　各國公使夫人は、去る十二日午後、皇后宮へ拜謁御機嫌を伺ひたり。

●東京府下私立女學校生徒　一昨年十一月、文部省にて取調べたる東京に於ける、官私立生徒數及び府縣別多寡一覽表に依りて、府下私立女學校生徒の數を摘記す、尤も舊き調査のとなれば、之を以て盡せり、至れりとは云ふべからず。

(成立學舍女子部)普、女紅生徒四百六十一人(海岸女學校)英、漢、英、聖生徒六十七人(靜修女學校)英生徒九十六人)香蘭女學校)普生徒七十四人(通俄女校)和、漢、俄、習生徒三十五人(靜女塾)英、和、漢、習生徒五十八人(櫻井女學校)普、女紅、生徒百四十五人(跡見女學校)女紅、和、漢、英、數生徒百三十六人(明治女學校)普、女紅生徒二百二十四人(興風女學館)英、漢、數、裁生徒五十三人(共立女子職工學校)普、女紅生徒三百十九人(女子佛英學校)佛、英生徒二百零三人(柴山女學校)普、女紅生徒二十六人(松榮女學館)普、女紅生徒二十人。

●幼稚園保姆生徒の數　府下幼稚園、及び園長保姆生徒の數を取調べたるに下の如くなりと。

(麴町區)公立三、保姆十三人男生二十九人、女生百二人、私立三、保姆六人、男生三十四人、女生三十四人、
(日本橋區)私立二、保姆五人、男生六十一人、女生六十四人、
(京橋區)公立一、園長一人、保姆四人、男生三十二人、女生四十一人、
(芝區)私立二、保姆八人、男生七十六人、女生四十三人、
(赤坂區)公立一、保姆一人、男生十八人、女生十八人、私立二、保姆一人、男生十四人、女生十六人、
(四ッ谷區)私立一、保姆三人、男生四十人、女生十二人、
(牛込區)公立一、保姆三人、男生四十人、女生二十五人、私立二、保姆八人、男生四十三人、女生四十人、
(小石川區)私立一、保姆壹人、男生三十人、女生十九人、
(本鄉區)公立一、保姆二人、男生三十一人、女生二十四人、私立一、保姆二人、男生十七人、女生十一人、
(下谷區)公立壹、保姆二人、男生三十五人、女生二十四人、
(淺草區)公立一、保姆二人、男生五十一人、女生三十人、
(本所區)公立二、保姆八人、男生六十九人、女生四十人、
(深川區)公立二、保姆六人、男生七十一人、女生五十二人、

●慈善會の素人芝居　本所橫網町の安生堂產院が、貧しき姙婦を無料にて入院せしむる美擧を發して、關根房吉、新場小安の兩人が發起となり、去る十五日、十六日、兩日間、飯充町友樂館に於て素人芝居を催ふし同院の資を助けたる由。

●慈善演劇會　女子救養院へ寄附の爲め、鹿鳴館に催す慈善演劇會は、來る廿一日の豫期なりしも、米國公使死去に付延期し四月一日午後八時より開會の由。

●私立女子授產場　府下麻布なる、私立女子授產場は、生徒追々增加し、目下三十餘名に至り、ハチカチーフの刺繡の如きは最も熟達し、橫濱よりの注文に應じ、盛に之に從事し居るといふ。

●結婚離婚　本年一月、東京十五區内に於て、結婚したるもの三百五十八人、昨年十二月より減ずること三百六十三人、又離婚したるもの百七十一人、十二月より減ずること百一人なりといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●京都府高等女學校　同校は、明治五年四月始めて業を開けり、此頃文學士梅本順太郎氏を新たに教師に聘せんと計り居る由、同校の倫理科に於ては、婦女鑑、小學、布氏道德學、論語等を折衷して用ゆ、教場の數は十八ヶ所、教員の數三十一名（内男十七名、女十四名）職員十一名、生徒は日本全國十一縣を除くの外、何れの縣よりも來り居る由にて、現今四百六十七名あり、來月初に卒業せんとするもの六十名、なりとぞ。

●授業料改正　去る廿一年京都府令第二十二號、京都府高等女學校規則中第二十五條を、生徒授業料は一學期金四圓と定め、毎學期の初めに於て之を納付すと改正し、又た同校別科規則第七條を和服裁縫科及洋服裁縫科生徒授業料を、一學期金二圓五十錢と定め、毎學期の始めに於て之れを納付すと改正し、來る四月一日より施行する旨去る十三日北垣府知事より府令したり。

●感心なる女學生　靜岡市尋常小學校四年期生徒、堀井はん子は、中々の勉強生なれば、いつも一組の中の首坐を占む、家極めて貧しきが故に、はん子は自ら夜業して授業料を學校に納め、敢て父兄の貲を仰がずといふ。

●女丈夫の紀念碑　長崎の女丈夫大浦慶子の爲めに、相續人大浦重治氏が紀念碑建設の擧ある由は、豫て聞及ぶ所なりしが、いよ〳〵建設の事に決したりといふ。

●一婦人傳道會社を起さんとす　彼の富豪バンダービルトの未亡人は、二十五万弗を以て、紐育に一の傳道會社を起さんとす。

●スクロヒス伯爵夫人死す　曩にアラバマ事件の際、米英兩國の間に立ち、伊太利王に代りて調和に盡力したる、伊太利スクロヒス伯爵は、后日幾千の入費を要せしやと問はれしとき、吾秘書官は吾妻一人のみと答へしてふ、伯が爲の最良唯一の秘書官たりし伯爵夫人は、此度死せり。

●ピンガム夫人の訃　太平洋底の電線は、我邦先々度の米公使ピンガム氏が夫人の訃音を傳へぬ、夫人の我邦にあるや、溫厚にして、能く良人を助け、良人と共に内外人士の仰慕を受けたりしに、今や卒然此報に接す、痛悼の情に堪へざるなり。

●獨逸皇太后巴里に遊ぶ　獨逸皇太后は、サイケンドルフ伯爵、及びベルポ、ペル伯爵夫人を隨へて、去月十八日夜佛國巴里府に到着したり、同夜獨逸皇太后が巴里に達する際、那破烈翁三世の妃ユーゼニー皇后も亦同地に着せしに、群民皆之を以て獨逸皇太后と誤認し、皆其の跡を趁ひ行きたれば、皇太后は靜にユーゼニー皇后の馬車を隨つて進み玉ひしとの事なりき。

●セルドン夫人の亞弗利加遠征　セルドン夫人は米國の產なれども、長く倫敦に住居せり、同夫人は、本月亞弗利加へ向け出發する筈なり、其目的は土人の人情風俗等を視察し、歸て小說著作の材料に供せんとするものなり而して該地滯留は三箇月間の見込なりとぞ。

週報

●官令　九月勅令を以て陸軍獸醫部現役士官補充條例中改正の件を裁可公布せらる　●十四日法律を以て帝國議會の協贊を經たる地租徵收期現改正法律を裁可公布せらる。

●政治三日松方大藏大臣貴族院にて演說す　●四日衆議院に於て特別地價修正案廢案に決す　●五日民報解停　●同日衆議院に於て青木外務大臣演說す　●六日内閣會議　●七日豫算案貴族院を通過す　●同日陸奥農商務大臣衆議院に演說す　●同日伊藤伯貴族院に演說す　●同日伊藤伯宮中顧問官并に貴族院議長辭退の上表を捧呈す●八日帝國議會閉會　●十一日花房義質氏宮内次官に任す　●同日田中特視總官宮中顧問官に轉任す　●十二日中島信行氏衆議院議長を辭す　●同日伊藤伯の辭表返附せらる。

●雜報　八日朝鮮國代理公使兼總領事河北俊弼氏卒す　●我國駐剳の米國公使スウヰフト氏逝去す。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

本號の女學雜誌

「ひさご」と假名せる、一の女秀才、わが社の爲に「車の轍」と云へる、秀麗美妙の新小說を寄す、則はち全篇を本誌の附錄とし、月ギメの花客に無代呈上す。別に注文するものは定價四錢也。

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候まゝ**百卷**をば僅に**二圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生する分八十冊にて**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづゝ買入を要する義にて其內撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家內經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸內の戰死」。大島圭介氏、德富猪一郞氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子敎育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪書に於ける國粹保存主義」。「犧牲献身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

第三版

百人一首講義

上製美本　五十錢　郵稅六錢
並製淡裝　三十五錢　同　四錢

正月の稽古に宜し　遺物に宜し
歌留多遊びに宜し　詠歌に宜し

女學雜誌社

西洋女教師にて米國に十三年間女子を敎育し、本邦に來り七年間亦た女子敎育に從事したる、熱心篤愛の人あり、敎授の需めに應ず、有志の人は女學雜誌社犬養に宛て申越あるべし。

家庭
廉價　**女學書類發行**　女學雜誌社編輯

子供の談

紙數八十葉　郵稅なし　定價十二錢

右は子供の爲になる好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結搆なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、龍の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とダヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、まましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉　郵稅なし　定價十二錢

右は。婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案內の事。散步、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち。西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉　郵稅なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を說き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案內

紙數百廿葉　郵稅なし　定價五錢
講述にかゝるものなり

兒育て草

紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々說明し、母として子を育つる總ての心得を悉とく講述したり。

邦文學

紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は同志社敎師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に說明したるもの也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述 つれ〴〵草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述 文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述 百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著 產婦小兒攝生法	一冊	同十六錢
關諭正路君纂 ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子著 善惡之岐	一冊	同卅五錢
横山雅男君著 婚姻論	一冊	同廿錢
島田三郞、植木枝盛兩君演說 廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治述 妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郞、巖本善治同著 公娼可滅	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三著 植物學	一冊	同十錢
林學生星野愼著 昆虫植物金石採集法	一冊	同十二錢
明治女學校敎師八木敍辰著 和書手本	四冊	同壹圓
女學雜誌社編輯 演說著作材料	八冊	同四十錢

下六番町六番地
女學雜誌社

女學生第十號は二月廿六日に發兌せり

其目次は

（一冊六錢郵稅とも）

女學生雜誌全國谷女學校は左の如し

明治女學校　女子學院　新榮女學校
女子神學校　共立女學校　フェリス和英女學校
頌榮女學校　跡見女學校　立敎女學校
成立舍女子部　女子獨立學校　海岸女學校
長榮女塾　東洋英和女學校　靑山英和女學校
金城女學校　高田女學校

●色を白くするさぼんの元祖たる三能さぼんは

藥劑士大鐘亣岱氏と製造人西條重兵衞氏と多年の實驗により主として男女全體の色を白くしにきびそばかす皮膚病及び諸傳染病の消毒に大効ある藥劑を配伍し調製したる物なり昨明治二十三年十月を以て弊店の發賣する所となり爾來日尚淺きも其効能の著しき事實に三能の名に背かざると愛顧諸彦の高庇により世に高評を蒙り弊店の幸福之れに過ぎず然るに三能さぼんの日に月に益々盛大なるを慕ひ數多の破廉耻商等種々まぎらはしき色を白くする○○さぼん或は何さぼん又は何と一雨毎に現出し何れも外見よく何分かの香氣を合み一寸素人好きのするさぼんなり然るに實際功顯わる三能さぼんは返て容形わしく御使用中何となくざらつく氣みあれども是れ即ち藥力の致す處にして功能を主としたる證據なり三能さぼんは決して香氣や形容を主としたる○○さぼんの類にあらず又尋常化粧石鹼と異なるものなり今回從前の商標即ち玆に掲げたる洋裝婦人の圖を以て公然商標とし農商務省登錄御許可相成候に付御愛求の諸君篤と右商標御覽の上他の形容さぼんに惑はされず愈御愛顧あらん事を江湖諸君に希ふ●定價一個十錢郵稅二錢郵券代用不苦候但二錢切手に限る右品各府縣下賣藥店又は和洋小間物店に取次販賣所御座候間御最寄にて御購求奉希候也



銀座一丁目

發賣本舖 つやぶきん本店 **佐々木玄兵衞**

賢母●日本女道●良妻

●生徒募集廣告

○**本科** 修業年限を三ヶ年とし、高等小學校二年級卒業以上の學力を有するものを入る、月謝金壹圓

○**豫科** 修業年限を二ヶ年とし、尋常小學校卒業以上の學力を有するものを入る 月謝金七拾錢

○**撰科** 本科豫科の中に就き、各自の望みに任せて之を授く、一科金三拾錢二科金五拾錢三科七拾錢四科以上金壹圓の月謝を收む

○**幼稚園** 本校附屬として之を置く六歲未滿の幼兒を保育する所なり、月謝金五拾錢

○**規則書** 詳細なる規則を知らんと欲するものは郵券をおくれ、學校は神田區猿樂町二丁目五番地にあり

東京女學校

貴女の友

毎月一回　定價五錢

貴女の友は、彼破壞的西洋主義教育家の手にて養成されたる所の、接吻婦人、舞蹈婦人、演說婦人、建白婦人等の如き、女性の大眞ヶ失へる輩を掃蕩刈除し、以て優美なる令孃、貞操なる良妻、嚴肅なる賢母たらしめんとを希望す。

第七拾六號

三月廿五日を以て發行すへし、見本を要する方は郵券五錢をおくれ。某婦人雜誌及某女學校の不心得を痛論せる論文あり、その他歌の話あり、植物標本採集法あり、新躰詩あり、婦人傳あり、家事經濟、育兒談、料理法、女禮式等、すべて婦人に適切有用なる事柄最大洩なく之を掲載せり。

東京麹町區上六番町四十一番地

東京教育社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日の丸

毎月一回發行一冊定價五錢郵稅五厘〇十二冊（即一ヶ年分）郵稅共五十四錢

身におはぬ賤が手わざも玉くしげ
あけてだに見よなかのこゝろを
本居宣長

日の丸雜誌は津田仙氏之を管理し世界最大の害物たる酒を禁じ以て國家の幸福安寧を計らんとするものなり左れば記事は禁酒に係る有益の諸說を主とすれども又文學經濟道德慈善等の事をも掲ぐ凡そ諸の記事何れも一讀一利を得少くとも身を立て家を起し一家の幸福を增し或は一國の昌盛を來すべく其味たるや酒よりも甘く、酒よりも愉快に、之を讀む者は必ず金鵄城外

下戶の樂地あるを知らん日の丸の

論說欄を分つ事左の如し

自ら津田仙及編輯人或は內外諸大家の說を掲ぐ

雜錄文學經濟道德慈善等の雜記面白き談話、敎訓、家

家庭叢談事經濟、衛生、醫藥等

小說樂んで淫せず、哀んで傷せず、愉快の中に自ら眞理を知るべき社會改良慈善事業道德文學經濟等に係る諸事きものの

彙報を掲げ殊に各禁酒會の實況は細大洩さず掲くべし

●**實効**日の丸出で之を讀て年來の大酒家が禁酒し造酒店が廢業し年季奉公中の番頭は他の業に轉じたるなど已に人の知る處なり蓋し此雜誌は兩刄の劔の如く人の骨髓を刺透すものなれば飮み拔けの夫あるもの、放蕩息子あるもの、病によはりたるもの、貧乏に困るものは皆來れ必らず癒され慰さめらるゝ事あらん

發行所　東京麻布本村町二百十七番地
大日本丁友會

國民小說

特別大廉價

郵稅四錢　紙數二百九十七頁

一口劍　幸田露伴
舞姫　鷗外漁史
胡蝶　美妙齋主人
細君　春の屋主人
眞夜　饗庭篁村
楠木　學海居士
流轉　北邙散士
新編破魔弓　南翠外史
拈花微笑　紅葉山人
大東號日記　思軒居士譯

此書の極めて廉價にして極めて面白き極めて珍奇の冊子たるは購讀諸君自ら知らん

改正價拾貳錢

東京市京橋區日吉町四番地
民友社

發行所　東京市麹町區下六番町六番地
女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三